新訂中等國語讀本 卷五

森林太郎 萩野由之 補
桑原吉之助 文編

375.9
Oc8
資料室

41476
教科書文庫
4
810
41-1909
20000
46544

375.9
Oo8

明治四十二年二月一日 文部省檢定濟 中學校教科用國語書

新訂中等國語讀本

落合直文編
森林太郎
萩野由之補

東京 明治書院

資料室

廣島大學教
46544
書
廣島大學圖書之印

新訂中等國語讀本卷五目次

一、伊能忠敬の晩學 その一……一
二、伊能忠敬の晩學 その二……四
三、スエズ運河……八
四、ポートサイドより友人に寄す（書翰）……一二
五、わが小園……一六
六、生存競爭……一九
七、野路の夕暮……二五
八、星と花（新體詩）……三〇

九、武將の文事……三一
一〇、國語國文の變遷……三三
一一、農人形……三八
一二、冒險心……四二
一三、樺太談判その一……四五
一四、樺太談判その二……五一
一五、銷夏日記……五六
一六、ジェッファーソンの日常十則……六〇
一七、小澤蘆庵と蒲生君平その一……六二
一八、小澤蘆庵と蒲生君平その二……六五
一九、岡井某に與ふ（書翰）……六九

二〇、御くるま（短歌）……七二
二一、祝文二篇
吾妻橋開通式祝辭……七四
同　答辭……七六
二二、桃山時代の工業……七六
二三、植物の景觀と氣象との關係その一……八〇
二四、植物の景觀と氣象との關係その二……八五
二五、六太夫の晴雨計……九〇
二六、運命その一……九一
二七、運命その二……九八
二八、桃李不言（格言）……一〇二

二九、セイロンの古都　その一……一〇三
三〇、セイロンの古都　その二……一〇七
三一、忠君愛國……一一一
三二、桶峽（新體詩）……一一七
三三、戰後の實業　その一……一二〇
三四、戰後の實業　その二……一二四
三五、職業の選擇……一二九

卷五目次終

廣島大學圖書之印

新訂中等國語讀本卷五

一、伊能忠敬の晩學　その一

忠敬、年十八にして、伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして、家を、その子景敬に讓るまで、自ら抑へて、平々凡々の人となり、一意專心、たゞ、伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を、最も圓滿に、最も麗しく果さん事を期し居たりき。

およそ、才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一擧手、一投足の勞をも惜み、單に、己が欲することにのみ、身を

忠敬　東河と號す、下總國武射郡小堤村神保氏の子。紀元二四〇五年―二四八一年。

抱(懷)

委ねんとするは、免れがたき習なり。たとひ、己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじて、わが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その人、たゞに、才氣あるのみならず、また、實に、德量ある人といふべきなり。

世に、才氣ある人は多し、才氣ありて、德量ある人は少し。年少くして、才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の、肉薄きがごとし。物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば、世の、奇才を抱きながら、成功を見ずして、中途に、事を廢する例は、數へもつくしがたし。忠敬が、算數、暦術の學を嗜み、かつ、これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて、市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし」といふを、唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら、家業に丹誠したるが如きは、實に、その德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ。景敬は、家を繼ぎぬ。一家の事、また、憂ふべきものなし。忠敬が、伊能家に對する義務は、こゝにおいて、圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は、はじめて、閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより、

忠敬の自由に用ゐることを得べし。この時は、忠敬、年、既に五十歳、常人にありては、もはや、老境に入るべき時なり。されど、心の壯なる人には、何歳の時も、前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試みるべき處なり。忠敬は、常人が、世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、はじめて、學に就き、而して、後、漸く、世に出でんとせり。後の、爲すあらんと欲する者、苟も、眞に爲すあらんと欲せば、青年、空しく過ぎて、身の、まさに老いんとするを歎ずることなかれ。

二、伊能忠敬の晩學 その二

異（特、殊）

曆法改正の擧　寛政九年に成る。寛政曆と稱す。

高橋作左衛門　紀元二四二四年——二四六四年。

さるほどに、忠敬は、その郷里佐原を出でて、江戸に到り、寓を、深川に定めて、一學生となれり。年こそ老いたれ、實に、一學生となれるなり。尋常一様の、笈を負ひて、郷關を出で、都門に遊びて、師を尋ぬる書生と異るところは、たゞ、その若きと、老いたるとの差のみ。かくして、忠敬は、身を、おのが好める學に委ねたるが、おのが滿足し、信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから、幕府には、曆法改正の擧ありて、これがため、特に、大阪より、高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は、東岡と號して、算數、曆象の學に精し。忠敬、急ぎ、東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に、師弟の契を結びぬ。時に、忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情

にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひ、おのれが學業など、その人に及ばずとも、なほ、强ひて、自ら高ぶり、あへて、頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、流石に、さる事なく、喜びて、そが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄となしたりといふ。

晚學のかたきは、實に、いつの世にありても、かゝる嘲笑の存するが爲なり。こゝを以て、非凡の士にあらずば、大抵、自ら恥ぢて、師に就き、學を修むる勇氣を失ひ、終に、空しく、志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。元來、老いて學ぶは、たまたま、その志の淺からざるを顯すに足るのみ。また、何の不可かあらん。況や、また、何の恥づべきところかあらん。思ふに、區々たる、群小の嘲笑も、忠敬においては、たゞ、蛙鳴、蟬噪を聞くが如くなりしならん。かゝれば、忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明なることなり。忠敬の學術は、さながら、堤防の決潰して、洪水のおし寄するが如き勢を以て、歩を進め、終に、その學の蘊奥を極めて、東岡門下に、肩を比すべきものなきに至れり。

測量の命を蒙る　寛政十二年、はじめて北陸道、及び蝦夷地測量の命を受く。

かくて、忠敬が、はじめて、幕府より、測量の命を蒙り、その、修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に、五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は、暮齡用ゐるに堪へずとする年齡なり。されど、忠敬は、氣力旺盛、さながら、壯年の

人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色、滿面に溢れ、卽日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて、勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に、その志すところを完成したりしは、一に、この、元氣勃々として、燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。たれか、日本人を、早熟、早老の人種なりといふ。これ、あに、われに、伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。（幸田成行）

三、スエズ運河

紅海を過ぎて、スエズ運河に入る。この邊より、氣候、稍清涼を覺え、日本の仲秋前後の如く、寒暖計は、七十七度に降れり。

スエズ運河は、世人の知る如く、有名なる大掘割にして、運河に近づかんとする處は一面の曠原、地中海に連り、その左右は、亞剌比亞、及び、亞弗利加の砂漠、砂山等にて、渺茫として、際涯なし。スエズの市街は、この河口の左に在り。戶數、およそ二千八百。その家屋は、概ね、煉瓦石造にして、三層、四層の高樓多し。河口には、船舶を修繕すべき船渠を設く。この地は、風土の、草木に適せざるがため、綠樹、青草を見ること稀なり。船、この河口に投錨すること數時間なりしが、その間、土人の、珊瑚屑、その他の產物を賣らんとて、これを攜へ來るもの、引きもきらず。そのうるさきこと、限なし。その土俗の醜陋にして、教育なきこと、一見して、知るを得べし。

レセップス

スエズ運河は、その幅、廣狹一ならざれども、廣き所は、およそ三町餘、河中、所々、沼湖の如きものあり。兩岸は砂泥なれば、潰崩する恐あるを以て、船の進行する所は、中流最深の一線路に止れり。されば、大船は勿論、小船と雖も、相離るゝ二十三メートル、乃至四十五メートルの間に往來し、頗る危險なるを以て、大に、その進行を緩にす。河中に、六七箇所の停船所あり。大船の行き合ふときは、此所に避けて、他の通過するを待つ。又、鑿河臺あり、十五六七哩毎に、これを設く。その河底を浚渫することの巧妙なるは、實に驚くばかりなり。

この世界無比、古今未曾有の運河開鑿の大事業を企てたる者は、實に、佛國のレセップスその人なり。聞く、最初、レセップスが計畫せし資本は、およそ八千萬弗の巨額なりしが、當時、レセップスの親戚、故舊は、その損益の係る所、極めて莫大なるをも顧みず、奮つて、資金を投じ、その事業を翼贊せりと。然るに、工事竣功を告げざる前には、その株券價額、一株五百フラン、卽ち、わが百二十五圓のもの、下落して、二百二十フラン、卽ち五十五圓となり、一時、非常の困難を極めしかども、成功の後、船舶、一たび通ずるに及んでは、忽ち騰貴して、現今は、五倍の價格に上りしを以て、當時、レセップスを嘲笑せし者も、今は、深く、自己の、先見の明なかりしを愧づるに至れりといふ。この運河が、いまだ開けざるに當り、アレキサンドリアよりカイロ、スエズ間には、已に、鐵道の設ありて、數十箇の列

佛國の外交家、西紀一八〇五年―一八九四年

上（昇、登）

車を備へしが、この運河、一たび開けてより、東洋航海の形勢一變し、今は、該鐵道の列車は、僅に四五箇を備ふるに過ぎずといへり。この一事を見ても、運河開鑿が、社會に、いかに、大便利を與へたるかを知るべし。然るに、この一大事業の創業者たるレセップスは、これを以て足れりとせず、更に進んで、パナマ運河を開鑿せんとしたり。その志氣の堅忍不拔なる、感服の外なきなり。（鎌田榮吉―歐米漫遊雜記）

四、ポートサイドより友人に寄す

先便、セイロンよりの拙書、さだめて御落手のことと存じ候。爾來、船足恙なく、アデンを過ぎ、スエズを過ぎて、昨夜、ポートサイドに安著いたし候。こゝは、御承知のごとく、埃及の東北端にある一小市にて、地中海の入口に候へば、身は、今、まさに、歐羅巴、亞細亞、亞弗利加三洲の境界の上に立てるにて候。

多年、夢寐の間に往來せし歐洲の地も、はや、指顧の間に逼りたれば、一行の人々、皆勇みよろこびて、滿船、何となう、氣も浮き立ちて見ゆるを、不思議や、小生は、たゞ、限なき怨恨、悲愁の思に、ひとり、胸をのみ傷め居り候。

そは、はじめ、香港を過ぎて、清國衰弊の狀を見しに起り、中頃、印度に入りて、その亡國の迹を弔ひしに養はれ、今、また、こゝに來て、埃及國の貧弱を哀むによりて、全く除

迹（痕、蹤）

盛者必衰（佛經語）

堪（耐、禁）

くべからざる、心中の苦と成り果てたるにて候。

盛者必衰の習とはいひながら、はやく、五千年の昔にありて、その文化を、世界に誇りたりし國の、今は、たゞ、その形骸をとゞめて、尖塔、堂閣の美、纔に、行客の憐を買ふに過ぎざるなど、いかに、悽慘の事に候はずや。嗚呼、これ、國民の罪か、そもそも、天道の循環、いかにともすべからざる數か。これを思ひ、かれを思へば、まことに、感慨に堪へざる次第に候。

わが船の、運河を過ぎしは、日、既に、三稜洲に落ちて、夕月の影、はや、砂上にほの見ゆる頃にて候ひき。月は白く、砂は赭く、近き丘のみ、黑く、峙てる中を、一隊の土人の、駱駝

蹠轉の思　詩經周南關雎篇に「悠哉悠哉、輾轉反側。」

に跨りて、徘徊する樣の奇なる、その寂寞荒寥の景、殆ど形狀すべからず。室に入りて、寢に就けば、玻璃窓、圓く、月光をやどし、終宵眠ること能はず候ひき。

その翌日、ポートサイドに著き候ひしが、夕暮になりて、一葉の小舟、わが船の下に漕ぎ來れり。中には、一人の美人ありて、人々の投げ與ふる錢をば、傘にて受け止め、胡弓に似たる樂器を彈き候ひき。さても、その音の悲しさ、泣くが如く、怨むるが如く、はては訴ふるが如く、心なき人々すらも、そゞろに、征衣を濕し候ひき。小生は、はや堪へかねて、いそぎ、船房に退き、輾轉の思に、ひとり、一夜をあかし候ひぬ。

運河の光景、レセップスの偉業、その他、しるすべきこと少からねど、今は、筆援るに堪へず。なにも、後便にゆづり候。

匆々。

五、わが小園

われに、二十坪の小園あり。園は、家の南にありて、上野の杉を、垣の外に控へたり。こゝは場末にて、家、まばらに建てられたれば、青空は、園の外にひろがりて、雲行き、鳥翔けるさまも、いとゆたかに眺めらる。

はじめて、こゝに移り住みし頃は、竹藪を拓きたるあとと覺しく、草も木もなき、はだかの園なりしを、やがて、家主なる

上野　東京市の公園の一。

軍に従ひて　廿七八年の役に、作者、日本新聞記者として従軍せり。

金州　清國盛京省

三逕就荒　「――、松菊猶存」。晋の陶潛が歸去來辭中の語。

人の、小松三本植ゑて、やゝ物めかしたるに、われも、鄰の老媼の與へくれし薔薇の苗を植ゑ添へて、四五輪の花に、吟興を鼓すること多きやうになりぬ。

一年、軍に従ひて、金州に渡りしが、その歸途、病を得て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を經て、家に歸り著きし時は、秋、まさに暮れんとする頃なりき。園の面、去年よりは、遙にさびまさりて、白菊のひと本、ふた本、ねぢくれて咲き亂れたるこの景に對して、靜に、きのふを憶へば、萬感、そゞろに、胸にせまり、からき命の助りて、歸りし身の哀は、たゞ、このうれしさに消されて、思はず、「三逕就荒」と口ずさむも、涙がちなりき。あり觸れたるこの花、狹苦しきこの園が、かくまで、人を感ぜし

めんとは、嘗て思ひ寄らざりき。

ましてそれより後、病いよいよ募りて、足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は、わが天地にして、草花は、わが、唯一の詩料となりぬ。われをして、いくばくか、獄窓に呻吟するに勝ると思はしむるは、この十歩の地と、この數種の芳葩とのあるがために外ならず。

次の年、春暖、漸く催して、鳥の聲、いとうらゝかに聞えたる日、病の窓を開きて、端近くにじり出でて、讀書に勞れたる目を遊ばするに、いきいきせる草木の生氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ薄寒き風の、ひやひやと、病衣の隙を侵すも、いと、こゝちよく覺ゆ。これも、鄰の老媼よりもらひし絲萩の刈株、寸ばかり、緑をふいて、伸び出てたらん、秋の色も思ひやられて、うれし。かくて、晝過より、夕影、椎の樹に落つるまで、何を見るともなく、醉うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして、その日一日を暮しぬ。（正岡常規）

動（搖）

六、生存競爭

地球上には、動植物各種をして、自由に增加せしむべき餘地は、少しもない。そこに、動植物の各種が、遠慮なしに、多數の子を產むのであるから、互の間に、劇しい競爭の起るのは、見易い道理ではあるが、その有樣を、詳しく論ずるには、まづ、諸生物の生活する有樣から考へてかゝらねばならぬ。

犯（冒、侵）

釋迦　名は悉達、中天竺摩竭陀國淨飯王の太子。佛教の祖。西紀前六二三年―五四三年

植物なしには、草食動物は生きて居られず、草食動物なしには、肉食動物は生きて居られぬ。草食動物を飼ふ人は、初より、毎日、若干の草を、犠牲に供するつもりでなければならず、又、肉食動物を飼ふ人は、初より、日々、若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。是等のものが、相竝んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは、到底出來ぬことである。

昔、印度の釋迦が、山中で、難行、苦行をしてをられる處へ、惡魔が、ためしに來た話がある。まづ、鳩に化けて、飛んで來て、「お釋迦様、今、鷹が、私を捕って食はうと追ひ掛けて來ます。何卒、憐と思うて、御助け下さい」といったので、釋迦は、直に、鳩を、懷に入れて、隱してやった所へ、また、惡魔が、直に、鷹に化けて、飛

僅（機）

んで來て、「お釋迦様、私は、久しく、物を食はず、非常に、腹が減ってをります。今追ひ掛けて來た鳩を食はなければ、必ず、直に餓死します。何卒、憐と思うて、今の鳩を出して下さい」といった故、釋迦は、どうしたら好からうと思案した後、自分の腿の肉を、少し殺ぎ取って、これを、鷹に與へ、遂に、鳩をも、鷹をも助けられたといふことである。素より、これは、苟も、慈悲、忍辱を旨とするものは、この心掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては、最も妙であるが、實際、この方法で、鳩も、鷹も助けられるかといふに、中々、さうは行かぬ。若し、世の中に、鳩も一羽、鷹も一羽より無く、これを、僅に一日だけ助けるのならば、差支はないが、總べての鳩と、總べての鷹とを、兩方ともに、何

時までも助けることは、決して出來ぬ。幸、惡魔が、一回だけより、鳩と鷹とに化けて來なかったから宜しいやうなものの、若し、根氣よく、このためしを、何回も繰り返したならば、腿の肉が、一度に、半斤づつとしても、十回には、五斤となって、今度は、釋迦が死んでしまふ。

又、長閑な春の日に、野外に散歩して見ると、草木の、青々と茂り、花の、美しく咲いてをる處に、蝶が、面白さうに飛び廻り、小鳥が、樂しさうに歌ってをる。詩人は、これを、詩に作り、畫家は、これを、繪にかいて、共に、この世の樂しさを賞め讃へるが、それは、極めて皮相な感じで、少し、丁寧に考へて見たらば、世の中は、決して、かう無事、平穩なものではない。鳥が、かう歌ってをられるのは、今日までに、數千萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらも、なほ、蟲の命を取らうと探してをる。又、蝶が、かう舞ってをられるのも、幼蟲の頃に、澤山の菜類を食ひ枯した結果である。而して、彼處の樹の枝には、蝶を捕へて食はうと、蜘蛛が、巧に、網を張って待ってをるし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて食はうと、鷹が、鋭い目を見張って、狙ってをるから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど、風前の燈の如く、一つ油斷すれば、忽ち食ひ殺されてしまふゆゑ、中々、氣樂に遊んでばかりはをられぬ。動植物は、總べて、かやうに相殺し、相食ひ合って、自然界の平均を保ってをるのである。

賞（褒、譽）

かゝる所へ、年々歲々、動植物の各種が、夥しく、子を產むの

であるから、その多數は、無論、他の動物の爲に、餌として食ひ殺され、生き殘るものも、「餌を得る爲に、甚しく相爭はなければならぬ。動植物の增加力は、實際無限であるが、それは、代々產まれる子が、悉く生存し、繁殖するものと假定した上のことで、現在の如く、いつも、產まれる側から、他の動物に、その大部分を食はれてしまふ場合には、素より、著しい增加の出來る筈がない。なほ、その上に、一地方における、各種の動物の食物の總量には、常に、制限があって、生き殘ったものを、皆食ふことは、到底出來ぬが、假に、兎が、一匹居るのを、犬が、二疋で見付けたとしたならば、先に、兎を捕へた犬は飽食し、後れた方は餓死せねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も、食ふ爲の競爭は免れぬ。又、兎の、二疋居る所へ、犬が、一疋來れば、速く逃げた兎は生き殘り、遲い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬ爲の競爭も、避けることが出來ぬ。動植物ともに、各自、皆、食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競爭してをるのが、實際の狀態で、これを、生存競爭といふのである。（丘淺次郎―進化論講話）

余は伊太利のミラノよりナポリに行かんとする伯爵公子なり。

七、野路の夕暮

余は心地よく、車の隅に凭りたり。むかひに、座を占めたる僕は、外套を、主の膝のあたりに置き、ほくちを、煙管の皿に點じつ。清涼なる空氣のこゝろよさ、いふばかりなし。

車は、美しく廣き、田舍路に出てぬ。昨日の雨に、大地、よくしめりたれば、馬の蹄も、車の輪も、塵を起さず。さきに、馬丁の代りし時、先なるものの得し酒手の多かりければ、後なるものも、望ありとや思ひけん、心地よきまで、馬を驅りぬ。馬車には、道すがらゆき逢はねど、驢馬に挽かせたる、もどりの空車を追ひ越ししこと、幾度ぞや。空車の主等は、けふの利潤の計算をするにや、頑然として、空囊の上に坐したるが、驅け通る馬車を見んと、頭を擡ぐるだに、ものうげなり。驢馬は、勇しき友の來るを見て、道を讓り、さて、事問ひたげに、首を捩ぢ向くるを、馬丁は、うるさしと、鞭を擧げて、打たんとす。驚きて、飛び退く驢馬、鈴聲戛然、搖らるゝ車に、驚く主の、ねぶたげに罵るを

讓（遜）

振りかへり見て、馬丁は笑ひぬ。

車は、前へ前へと進み行く。左右の竝木は飛ぶ如く、前に見ゆるはなれ家は、忽ち、側に來り、また、忽ち、後に殘れり。稻田の邊に來れば、祕密らしきそよぎ聞ゆ。しなやかなる幹に著ける鋭き葉は、夕風に吹かれて相摩軋し、えもいはぬさゝやきすなり。その間には、幾千の昆蟲、稻の若葉にとまり、または、濕りたる土の上を飛びかひて、鳴けり。

車の、ロヂを過ぐる頃、涼しく、露けき夕は、空より、地上に降りぬ。夕景色は、家をも、野をも掩ひぬ。數々の田舍の寺より、アヱ、マリヤの鐘の聲す。草葉に置ける夜の露は、幾千の寶石かと見まがふばかりに輝きて、大空に滿ちたる星の、ふるひつ

ロヂ　ミラノの東南、ロンバルヂアの都會。

アヱマリヤ（Ave Maria）　聖母マリヤの讃美。

つ透き徹りたる光を反射せり。この時、野の花と、新に芟りし草とは、香を放ちて、滿天地の氣象は、一種の、暢美なる感情を催したり。嗚呼、この感情を知ること、最も深きものは誰そ。道の傍なる木立より、うれしく、優しき聲に、祝賀の歌を歌ふ鶯を措きて、また、誰かあらん。

この歌を聞かんと願ふものは、暖き春の夜に、ロンバルヂアなる野邊に來よ。野は、細流に、縱横に截られ、街は、水に夾まれたる、その上を掩ひてそよぐ木の枝は、かの、めでたき歌者の、最も愛づる住居なり。

馬丁は顧みつゝ、「次の驛は、馬の數少ければ、客人を待たせやせん。おのれ、この埋合に、一骨折らん」といふ。余は、荒涼たる

措（置）

ロンバルヂア　北伊太利なる原野。

村驛に、夜深けて、馬を待たんは面白からず思へども、かくいふは、馬丁の套語なればと、みづから慰めて、たゞ、「汝は、汝の職分をつくせ」とのみいひぬ。

この職分をば、げにも、よく盡しぬ。鞭を揚げて、馬に、驅足を踏ませつ。車の速力、あまりに大なれば、輪は、眞直なる道に、逶迤たる蛇線を作りぬ。乍ち右へ、乍ち左へとまがる車におどろきて、僕は、側なる欄を握りぬ。家も、木も、橋の欄干も、道の印の石も、あわてふためきて、走り去るがごとし。一時間ならぬに、さだめの路をば過ぎつ。見ゆるは、次の驛の、はじめの一燈なり。（森林太郎―水沫集）

八、星と花（天地有情）

おなじ自然の、
御手に育ちし、
みそらの花を、
わが世の星を、
かれとこれとに、
にほひはおなじ、
ゑみと光を、
かはすもやさし、
さればあけぼの、
御空の花の、

おん母の、
姉と妹、
星といひ、
花といふ。」
へだたれど、
星と花。
よひよひに、
花と星。」
雲白く、
しぼむ時、

太田持資 入道して道灌と號す。扇が谷の上杉定正に仕ふ。紀元二〇九二年―二一四六年

七重八重の歌 後拾遺集、兼明親王の歌

見よ白露の、
わがよの星に、

ひとしづく、
涙あり。』

九、武將の文事

太田持資は、上杉の家老なり。鷹狩に出でて、雨に遇ひ、百姓の家に入りて、「蓑を貸し給へ」といひしに、わかき女、ものは、何ともいはで、山吹の花、一枝折りて、いだしければ、「花をくれよ」といふにあらず」とて、腹立ちて歸りしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重、花はさけども、山吹の、
みのひとつだに、なきぞかなしき。

といへる古歌の意にて、蓑なしと申す事を、いはで知らせ申したるなり」といひければ、持資驚きて、「われ、かほどの事をだに知らず、百姓の娘にも劣れる事くち惜し」とて、それより、書を讀み、歌に、心を寄せたり。

上總國へ、軍をいだす時、「敵、海ぎはの崖上に、石弓を張りたり。潮滿ちたらば通り難かるべし。いかに」といへるものあり。折節夜半なるに、持資、「いざ見て來ん」とて、馬を乘りいだしけるが、そのまゝかへり、「潮は干たり」とて、軍をおし通しけり。これは、

遠くなり、近くなるみの、濱千鳥、
なく音にしほの滿干をぞ知る。

遠くなりの歌（出所不明）

と詠める歌あり。それを思ひいだして、千鳥の聲、遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。また、暗夜に、利根川を渡す時、「いづこか、淺瀨なるべき」と、口々にいひけるに、持資、「古歌に、

そこひなき、淵やはさわぐ。山川の、
あさき瀨にこそ、あだ波はたて。

と詠めり。波の荒き處を渡せ」と下知して、難なく、淺瀨を渡りけりとなり。（湯淺元禎―常山紀談）

そこひなき　古今集に出づ。作者素性法師。

一〇、國語國文の變遷

中古、漢文の、佛法と共に、わが國に入り來りし時は、恰も、渴

許（赦、宥）

者の、水を得たるがごとく、非常なる熱度をもて歡迎せられ、漢文もて、公私一般の用文となし、律令、格式より、歷史、風土記の編纂、裁判の宣告、官吏の請暇、その他、租稅の帳簿、貸借の證文に至るまで、すべて、皆、不十分ながらも、漢文を用ゐしめたりき。この時の人の思想には、その語原、語法を殊にしたる漢文と國語とは、遂に相合一すべからざることを思はざりしか、或は、また、漢文、漢語を用ゐて、わが、固有の國語を撲滅せんとの企なりしか、今より料り知るべからざれども、とにかく、一國の國民としては、一國の命運と共に、固有の國語を愛重すべきことを忘れたりしが如し。固有の國語を撲滅するは、事情の許さざるところにして、當時、實際のありさまは、漢文は、ひとり、博士、學士の間に行はれ、僧侶に行はれ、國民の一部に行はれしにとゞまり、政事上の公文、及び、政府編纂の歷史は、形式の美觀にとゞまりて、一般の國民にとりては、到底、その耳目に熟すべくもあらず。却りて、文武離隔し、朝野蔽塞して、大政振はざる原因とはなりしなり。

かくのごとく、學世、迷霧の中にありしが、幸に、豪傑の士ありて、音韻、および、假名の用法を發明し、これを、通俗に用ゐまた、和歌に用ゐ、國語と相密著して、自在に使用するを得しめ、その後、また、一歩を進めて、漢字まじりに活用し、國語を經とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として、さらに、一層の便利を感ぜしめたりき。

林道春
羅山と號す。德川氏の儒官。紀元二二四三年—二三一七年

水戸義公
德川光圀、義公は諡。紀元二二八八年—二三六〇年

かくて、假名は、世間一般に、便利を感ぜしめ、かつまた、その使用法の、更に、一歩を進めて、漢字まじりの物語體となり、いよいよ、便利を加へたるにかゝはらず、當時にありては、なほ、女文字といはれて、朝廷の公文に用ゐられざりしのみならず、鎌倉の武力第一の時においてすら、政府の記錄、および、裁判申渡は、拙劣なる文章生、または、僧侶の手を藉りて、鵺のごとき漢文を用ゐたりき。德川氏にいたりてはいかに。林道春は、東照公の命を奉じて、信長譜、秀吉譜を編述せしに、なほ、漢文を用ゐたりき。余が、最も惜むところのものは、水戸義公の、大日本史を編纂せらるゝにあたり、三宅觀瀾などは、國文を用ゐんとの議を建てしが、當時、多數の勢に制せられて、遂に、

三宅觀瀾
名は緝明、儒者。紀元二三三五年—二三七八年

帆足萬里
木下侯の儒官、紀元二二四三八年—二五一二年

漢文を用ゐるに至りしことにして、氣運の、いまだ至らざりしが爲とはいへ、遺憾の事なり。幕政三百年の間、文人輩出して、漢文の著述少からざりしかども、帆足萬里は、猿の狂言なる一語をもて、これを冷評したるもうべならずや。

もし、德川氏の初に當りて、一の豪傑ありて、漢文の、つひに、國語と一致すべからざるを知りて、國文の體を一定し、公文に、歴史に、教育に、これを用ゐしめたりけんには、その間に生まれたる俊才の士は、青年の精神力を、佶倔、艱澁なる漢文の修業に用ゐずして、他の、有用なる事業に用ゐ、三百年の文運は駸々として、一層高度の進歩に達したりしならん。要するに、わが國民が、國文、國語における、固有の特性は、長き年月の

開、一種の事情のために、發達を妨げられつゝ經過したりしは、歴史の證明する事實なり。（井上毅―梧陰存稿）

一一、農人形

往昔、繼體の帝が宣らせ給ひし「一婦織らざれば、萬人凍え、一夫耕さざれば、萬人飢う」との聖詔は、申すも畏きことながら、今もなほ、貴き勸農の訓として、人々の仰ぎ奉る所なり。近くは、武門の治となるに及びても、諸侯の、農を重んじて、これを奬めたりし蹟の觀るべきもの、亦少からず。

水戸の常磐公園は、わが邦三公園の一と稱せらる。その、小高き丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて、遠く、一帶の郊野を、雙

一婦織らざれば　元年三月の詔に「士有二當年而不レ耕者一、則天下或受二其飢一矣、女有二當年而不レ績者一、天下或受二其寒一矣。」

三公園　金澤の兼六園　岡山の後樂園　水戸の偕樂園

眸の中に收むることを得べし。園は、烈公德川齊昭の創設せし所、名づけて、偕樂園といふ。蓋し、民と偕に樂むの義に取れり。されば、常に、士民の來り遊ぶにまかせ、花蔭、行厨を披きて、一日の歡娛を竭さしめ、月下、瓢を傾けて、一夕の清遊を縱にせしめきといふ。公園には、今もなほ、素燒の人形を鬻げり。その形や、結髮の老農が、積藁の側に跪坐して、笠を、その前に置ける狀に取る。製法、極めて粗なりと雖も、亦、頗る、雅致に富めり。世人呼んで、これを、「烈公の農人形」といふ。齊昭、居常、深く、心を、農事に致して、屢、偕樂園中の小亭に登臨して、親しく、稼穡の勞苦を察しき。嘗て、銅を以て、農人形を鑄しめ、常に、これを、座右に置けり。その、食膳に向ふや、必ず、まづ、初穗の意を以て、

烈公　紀元二四六〇年―二五二〇年

小亭　好文亭と名づく。

一箸の飯粒を、これに供へ、然る後に食するを、例とせりといふ。或時のことなりき、齊昭は、

朝な朝な飯食ふごとに忘れじな、
　　惠まぬ民に、惠まるゝ身を。

農人形

といふ一首の和歌を、侍臣に與へていへらく、「古より、賢君は、民を見ること、なほ、慈母の、赤子におけるが如しといへり。されど、我は、少し、これに異りて、百姓をば、わが乳母なりと思ふ。われは、百姓に向ひて、何等の憐を施さざれど、百姓は、わが爲に、命を繫ぐべきものを與へぬ。その恩や、乳母と、何の擇ぶ所かあらん」と。爾來侍臣等は、この農人形を呼びて、「御百

擇（撰、選）

光圀　紀元二二八八年―二三六〇年

菟裘の地　致仕隱居の地をいふ。左傳に出づ。

容（入）

姓といふに至れりとぞ。今鬻ぐところの農人形は、蓋し、これを模造したるものなり。古人の、意を、勸農に用ゐしや、また懇なりと謂ふべし。

齊昭の祖先なる義公德川光圀も、亦、嘗て、菟裘の地を、太田の鄕西山といふところに擇びぬ。地は、水戸を距ること數里にあり。かの、わが邦第一の大著作とせらるゝ大日本史は、實に、公の監修せられたりしものなり。公は、又、暇ある毎に、農民を、茲に引見して、親しく、農事を談ぜられきといふ。庵を西山莊と稱し、庭前に、心字の池あり。池を隔てて、谷あり、山あり。春秋の觀賞、兩つながら好し。名づけて、櫻が谷、觀月山といふ。室は、廣さ、十數人を容るゝに過ぎず。殊に、書院との間に、全く、そ

の閾を撤したるは、貴賤の別を離れて、親しく、農民等と、談話を交へんとする意に出でたりと聞く。齊昭の精神は、多く、光圀より得來る。その、意を、農事に用ゐるも、亦、前後相承けたりと謂ふべし。（田園都市）

一二、冒險心

世に處するに、常識なかるべからず。しかも、常識のみならず、また、何人も、幾分の冒險心あるを要す。苟も、冒險心のみありて、常識なくば、これ、無謀の狂夫のみ。もし、常識にのみ富みて、冒險心なからんか、また、これ、碌々たる凡骨に過ぎざるべし。人生の要は、七分の常識に、三分の冒險心を調合するを以て、適當なりと爲すべきが如し。

人間は活動せざるべからず。而して、いはゆる用心家なるものには、思案に、日を暮し、何等の活動をも爲さずして、空しく、一生を終ふるものあり。愼重の態度など云へば、いかにも立派に聞ゆれども、時としては、臆病者の遁辭たることなきにあらず。

およそ、社會も、國家も、廣くいへば、人類も、いはゆる用心家に負ふところ少くして、冒險家に負ふところ多きは、古今の歷史、實に、これが證人たり。新世界の發見者たるコロンブスにせよ、喜望峯を週りて、印度への航海を開始したるバスコ、ダ、ガマにせよ、苟も、人類の恩人帳に、その名を登錄せらるべ

コロンブス　亞米利加發見者、伊太利の人、四紀一四三八年―一五〇六年

ガマ　葡萄牙の航海者、西紀一四六九年―一五二五年

き資格あるものは、必ず、幾分の冒險的血液、その血管中に流れざるものはあらず。看よ、露國の、中亞細亞、及び、西伯利亞に膨脹したるは、誰の力ぞ。英國の印度大帝國は、何人の手によりて、建立したるぞ。米國民の、中央の大原野を横斷し、太平洋方面に蕃殖したるは、何者の先導に出でたるぞ。これ、あに、かの用心家輩の夢想する所ならんや。

いかに、天資聰明なる人と雖も、人、既に、神にあらず、焉んぞ、未然を、悉く洞觀するを得べき。故に、深く思ひ、審に慮り、而して、その、既に得たる所を以て、いまだ確めざる所におよぼし、成るも、成らずも、みづから、その結果に對する責任を負ひ、斷斷乎として、これを決行すべきのみ。再言すれば、知慮の及ぶところは、知慮を以て、これに處し、知慮の及ばざるところは、勇氣を以て、卽ち、冒險心を以て、これに處すべきのみ。吾人は、當初より閉目せよといはず。苟も、視力の達するところは、飽くまで、これを正視せよ。しかも、その、及ばざるに際しては、決して、低徊、遲疑するを須ゐず。宜しく、暗中の飛躍を試みるべきなり。

須(用)

然りと雖も、もし、謀るべきを謀らず、吟味すべきを吟味せず、徒に、輕舉、妄動をなすが如き者あらば、これ、あに、吾人の本意ならんや。嗚呼、あに、吾人の本意ならんや。(德富猪一郎)

一三、樺太談判　その一

幕使の一行　文久元年外國奉行竹内下野守、松平石見守、目付京極能登守等を歐洲に遣す。

ムラビヨフ　露國の外交家、安政六年日本に來る。

ゴルチャコフ公

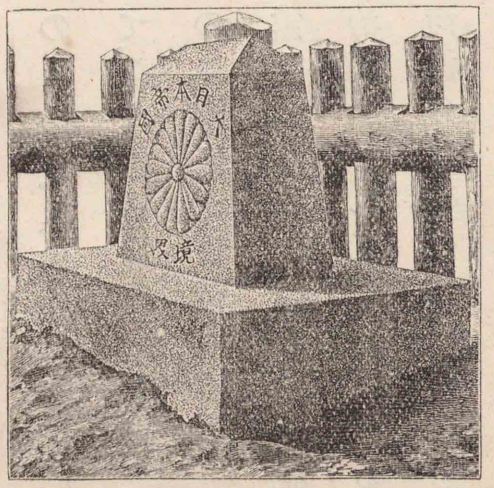
幕使の一行は、英蘭孛三國を巡りて、いづれも、開港延期の承諾を得たりければ、更に、露都、セントペテルブルグに至り、談判に及びけるに、延期は、素より、露國政府にて承諾したれども、こゝに困難なるは、樺太境界の談判にてありき。抑、この境界は、往年、露國より、フーチャチンに、全權を授けて、日本に申し込みたりしに、要領を得ず。その後、また、ムラビヨフ伯を、使節に命じ、全權を與へて、日本に派遣したりし時にも、日本は、その言ふ所を主張して、更に、境界を定むることを肯せざりき。されば、この度の日本の申込には、應ずることを好まざれども、折角の使節ゆゑ、枉げて談判せしむべしとて、露國外務大臣ゴルチャコフ公は、亞細亞事務總裁イグナチエフ伯を、

露國の皇子にして、西紀一八〇〇年生

イグナチエフ　後内務大臣となる、西紀一八三〇年生

全權に命じて、その談判に及ばしめたり。

幕府の三使は、飽くまで、北緯五十度境界說を主張して、「この境界は、萬國の地理學者が公認する所なり」と述べたるに、イグナチエフ伯は嘲り笑つて、地理學者の學說や、地圖の色分は、決して、政治上の證據とするに足らず。若し、地理學者の說に從はば、サガレンといふ名も滿洲語なり。現に、貴國にて、樺太と稱ふるも、唐人の轉訛にあらずや。又、地勢上より論ずれば、樺太は、日本の地にあらずして、むしろ、滿洲大陸



現時の樺太境界標

に屬すべきこと、學者の定說なり。さて、又、地圖は、歐洲諸國にて、勝手に、色分をなし、その中には、五十度を以て境界としたる、貴說の如きもあれば、五十一二度、若しくは、四十五度のものもあり。又、全く、日本に屬せしめたるものもあれば、これに反して、全く、露國に歸せしめたるものもあり。御所望とあらば、それらの地圖何十百幅、盡く取り出して、貴覽に供すべし。然れども、露國は、さる、迂遠なる學說を、證據とはなさず、常に、實際の政治問題として、談判に涉るべし。それ、兩國の境界は、山岳、又は、河流の地勢に據りて定むべし。徒に、經緯度を以て劃する時は、實地の境界に、不都合を釀して、却って、將來の紛議を招き、むしろ、境界を定めざるに若かざる恐あり。これ一つ。次に、露

涉（亘、渡）

國は、貴國の說に從ひ、既に、境界を定めずして、共領の姿となしたれば、今更、不都合なる境界を定むる必要を感ぜず。これ二つ。次に、露國の移住民は、現に、サガレンにおいて、五十度以下の處まで南下したるに、貴國人民は、纔に、その南方の海岸において、漁獵を營めるのみ。これ三つ。この三箇條の事實あれば、露國は、五十度の境界は、素より承諾すること能はず。然るに、四十八度內外の處は、河流と山岳とありて、自ら、天然に、境界をなせる地勢なり。こゝを以て、境界と定めば、地境劃然として、將來の紛議もなく、貴國の爲には、十全の利益なるべし。この議は、露國において欲する所にはあらざれども、使節に對して、その面目を得しめ、以て、露國が、貴國に對する好意

を表するために、枉げて承諾すべきが、如何にや」と演べたりけり。

竹内下野守は、蝦夷地の實況を詳知せる人なりければ、露國全權委員のいへるごとく、樺太の北緯五十度内外の處には、一の日本人も居住せず、又、事實において、日本の政令の行はれざるを識れり。松平石見守は慧眼にして、多少、外交談判に、經歷ある人なりければ、五十度境界説は、到底、露國において承諾せざる問題たることを識れり。依って、京極能登守にも議り、組頭の意見をも聞き、終に、隨從の諸員を集めて、その所存をも尋ねられけり。

識（知）

組頭　柴田貞太郎

一四、樺太談判　その二

蓋し、竹内、松平正副兩使の趣意は、「われら、當國において、樺太境界談判の全權を承って罷り越し、既に、その議に及べるが、到底、五十度を以て、日露兩國の境を劃せんことは行はるべしとは思はれず。露國が、前年より主張せる趣意といひ、今、また、その全權が辯論するところといひ、最後の目的は、樺太全嶋を、己が所領となす望なるは明白なり。然るに、この程よりの談判において、『四十八度内外の處にて、山河の形勢に由りて、その境界を定むべし』と發議したるこそ、この上もなき幸なれ。われら兩人は、一歩を、彼に讓りて、これを諾し、將來に動すべからざる、公の約定書を取りかはし、以て、他日の葛藤

對馬守
老中安藤信正、紀元二四七九年—二五三一年

を絶ち、樺太南部の地を、安穩に維持せんとは思ふなり。依つて、速に、露國全權委員に對し、その決議に及ばんずる所存なり」といふにあり。京極は、これに反對して、「樺太境界談判の全權は、われら三人、御委任を蒙りたれども、對馬守殿より、『余が在職中において、日本の土地を、一寸たりとも讓與することを欲せざれば、その旨相心得て、談ぜらるべし』との內訓あり。然るを、五十度を卻きて、境界を定めんこと、この內訓に背くのみならず、實に、我が日本國に取りて、再び恢復し難き國損なり。故に、拙者は、同意することをがへんぜず」といふにありて、一場の大議論と成れり。

兩使は慨然として、「今日の機會、一たび失はば、決して、再び得ること能はざるなり。われら兩人は、日本國將來の計を思ふが故に、閣老の內訓を顧みず、將軍家より、公然に與へられたる全權を以て、この境界を、四十八度の邊に定めんとは欲するなり。歸朝の上、その御咎を被らば、われら兩人切腹して、申譯を致すべし」。國家の御爲に、身命を棄つること、素より覺悟の所なり」と演べたれば、京極も、亦、憤然として、「一命を棄つるは、拙者とても、何ぞ、公等に劣るべき。但、日本の國辱、國損は、われらが痩腹、幾百切ったりとて、とりかへしの附くべきものにあらず。拙者は、飽くまで、內訓の旨を守り、全權御委任外に出でて、境界を定むることに同意せず。さるを、强ひて約定せんとあらば、御目付の職權を以てさし止むべし。勿論、その

談判にも列席せず、約定書にも記名、調印せざるべし」と論じて、各、その說を主張せり。よつて、組頭以下、各、勘考を盡したる上にて、意見を、三使に申し立つべしとの事にて、その日の會議を散じたり。

さて、右の兩議の中にて、いづれを採らるべきかといふことに就きて、隨行員中、年少氣鋭にして、外國の事情を知れる輩は、兩使の說に贊成し、又、一方の、老練實著を得意とせる俗吏の輩は、京極の說に同じ、各、見る所を取つて動かず。右に說き、左に論じて、是非を爭ひ、或は、口頭を以て、或は、書面を以て、所見を、三使に陳述したり。

然れども、組頭柴田氏は、初より、斷行を、不可とする人なりければ、頻に、利害を說いて、兩使を諫め、加ふるに、この一行にて、外交上、尤も老練の才ありて、顧問に備りたる森山氏も、熟考の上にて、遂に、不斷行說を採りたるにより、數日の評論の後に、竹內、松平の兩使も、京極の不同意を壓伏する術なければ、その持說を枉げて、不斷行說に從はれたるぞ、實に殘念至極の次第なる。嗚呼、當時、兩使が、斷行說を立てられたる時において、御目付に、異議なく、組頭以下、皆、これを贊成したりしならば、兩使は、この時を以て、日露兩國の境界を定め得て、實に、拔群の績を、後世に遺したるべきに、異議のために、その目的を達するに由なかりしは、幕末、千載の遺憾とも謂ふべかりしなり。（福地源一郎—懷往事談）

森山氏
名は多吉郎、長崎の人、蘭學に通ず。

今年も云々　慧鍔の四季の今樣の一。

洒灑、瀉、注、灌

一五、銷夏日記

七月一日　「今年も、半は過ぎにけり」と、鄰の女兒うたふ。

三日　半夏生、かへりて雨なり。籬の楓枯れし迹に、女竹、五竿植う。

今植ゑた、竹からも來る、嵐かな。

とは、古人の句。雨洒ぎて婆娑たる、木には見られぬ趣深し。

八日　三日月清し。今夕、はじめて、近きあたりの大榎に、蜩の鳴くを聞く。

十三日　鄰家の翁、杉籬ごしに、「泰山木の花咲きたれば、見に來よ」といふ。往きて見る。葉は、交讓木のそれに似、花は、白木

逗子　相模國三浦郡

原宿　東京府下豐多摩郡

ラファエロ　伊太利の畫伯。西紀一四八三年―一五二〇年

山陽先生の山紫水明處　頼襄、山陽と號す。儒者。居を鴨河の畔三本木に卜し、山紫水明處といふ。紀元二四四〇年―二四九二年

蓮を、三つ四つも合はせたる程にて、芬香譬へん方なし。富麗にして、しかも、品高き花なり。

十六日　去年、近處の林より移し植ゑし山百合、はじめて開く。逗子あたりは、六月の中旬を盛とするに、一月も後れたる、一は、今年の氣候の故もあるべし。盡日、細雨、煙の如く、原宿の夏、いと寂し。友人某より寄贈せられたる「畫聖ラファエロ」を讀む、眞面目の著作、ラファエロ、及び、その時代の一斑を窺ふに、「倔强なる手引草なり。

十七日　嫁菜の花一輪咲く。こは、去秋、京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より、掘りて來しものなり。立ちて見る程に、

水の音も、心もともに、すみゆきて、

月夜しづけき、秋の賀茂川。

と詠みし、その折の清興、水の如く涌きかへり來ぬ。午後、澁谷の川に、鮒釣に行く。水まさりて、青蘆を沒し、川柳の偃して、小きアーチを作れるを、心得顔の水馬の、ついつい潛り行けば、犬蓼の花搖ぎて、小き蛙の、ざんぶと、水に飛びこむも、興あり。時々、雨しぶきて、風景、みるみる、淡墨の畫になりゆく。傘、蓑、笠、こゝら見えたれど、獲物ありとも思はれず。我も、一尾を得ず、蚋に螫されて歸る。

澁谷 東京府下豐多摩郡

十八日　菊に、肥料を遣る。花を愛し初めて、いつしか、糞尿も厭しからずなりぬ。糞尿を愛するにあらず、花を愛すればなり。清濁併せ呑むといふこと、耳の痛きほど聞き知り居れど、わが量狹ければ、異を嫌ひ、非を惡みて、みづから、世を窄うす。はづかしきことなり。

惡(憎)

二十日　朝の程、日影さしたれば、貝細工の花、いと美しく開きたるに、やがて、曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣、見るが内につぼみぬ。またの名を、萬年草といひて、盛の時に摘み、蕊をだに去れば、萬年も、色を保つといふ花なれば、少しの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな。たれか、爾に、かく、みづからも愛惜することを教へし。

廿五日　晴。夙起、小園を歩めば、蟲の聲きよく、杉籬の蛛網、露を帶びて、白絹の光あり。撫子花、檜あふぎ、百日草、千鳥草、桔

梗、日まはり、金蓮花など、露に濡れそぼちて、夢、いまだ醒めじと見ゆ。亞米利加白薊、またの名水蝶花を、隅の方に、捨植になし置きたるに、何時の間にか、いと大くなりて、盛に、花を著けたり。先年の夏、母上の、この花を見て、「西洋の花は、皆丈夫なり。他に、頓著なく、おのが咲くべき花を咲かせて、逞しきを見よ」、と宣ひし一語、耳に響きしより、この花を見る毎に、その語を思ひいでずといふことなし。夕方、樺色の雲、西鄰の枯樟の末に浮びて、蜩の聲涼し。（徳富健次郎）

ジェッファーソン　合衆國第三の大統領。西紀一七四三年―一八二六年

一六、ジェッファーソンの日常十則

一　今日なし得べき事を、明日まで延すこと勿れ。

二　汝、自ら爲し得べき事を、人に爲さしむる事勿れ。

三　汝、金錢を得るまでは、斷じて、これを消費すること勿れ。

四　たとひ、廉價なるものにもせよ、汝の、必要なきものを買ふこと勿れ。

五　奢侈は、飢渴、寒冷よりも、吾人を損することおほしと知れ。

六　小食を悔ゆべからず。

七　みづから好みて爲す事には、懶しと思ふことなし。

八　初めて起りたる惡事は、最も多くの苦痛を與ふ。

九　事を爲すには、その、平滑なる把手（トッテ）より始めよ。（モノトコロ）

一〇　怒りたる時には、言語を發する前に、十の數を數へよ。
もし、甚しく怒りたる時は、百の數を數へよ。

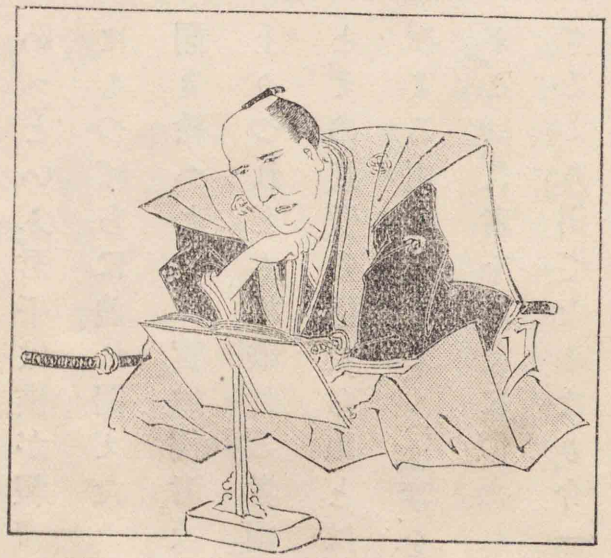
一七、小澤蘆庵と蒲生君平その一

蒲生君平、山陵探求の爲に、京に赴きし時、かの地に、絶えて、知る人なかりければ、便らん方もなくて、困じ果てたり。時に、小澤蘆庵は、古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世に拗ねたる隱逸なりと聞きしかば、その助を借らんとて、やがて、蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出て迎へて、「いづこより」と問ふ。佯りて、「某は、下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舍には、よき師なし。主人の翁は、琴の妙

君平　初伊三郎といふ、名は、秀實。高山彦九郎、林子平と共に、寛政の三奇人と稱せらる。紀元二四二八年―二四七三年。

蘆庵　歌人。紀元二三八三年―二四六一年

手にておはする由聞き傳へて、はるばると尋ね來つるにて候ふ」といふ。僕は、奥に赴きて、これを告げたるに、蘆庵は、聲を高くして、「あな、無益にも訪はるゝもの哉。汝いでて、しか答へよ。『主人は、久しう、客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちだにも、親しうものせるは稀なり。琴は、若かりし時搔き鳴したりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに教へよといはるゝがうるさければ、近頃うち擯きて、薪に代



蒲生君平

へたり。かゝれば、所望に從ふべくもあらず。他に求め給へ』といへ」といふ。君平は、僕が報ずるをも待たず、「翁の御答は、こゝにも、つばらに洩れ聞えたり。某、なほ、一言あり。願くは、枉げて聞き給へ。われは、實は儒者なり。しかじかの志願ありて、都に上りつれども、相識れる者、絶えてなし。翁の、古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに、『琴を學ばんとて來つ』とはいひしなり。こは、長者を欺くに似たれども、その虚言は、已むことを得ざるより出でたるなり。今一度、わ殿を勞せん。この由取り次ぎ給へ」といふ。蘆庵も、これを洩れ聞きて、「さりとは思ひかけざりき。そは、珍しき客人なり。對面せずば、悔しきこともあらん。『こなたへ』と申せ」とて、やがて、面を會はせけり。君平、深く歡びて、事の趣、つばらに語り出づるに、蘆庵、ひたすら感歎して、「足下は、得がたき學士なり。さる志ならんには、わが庵に、杖を留めて、こゝらあたりの陵を、靜に探求し給へ」とて、又、他事もなくもてなしけり。

一八、小澤蘆庵と蒲生君平　その二

これより、君平は、日毎に、陵を訪ねめぐるに、ともすれば、日暮れて歸るを、主人は、いつも、みづから、風呂を焚きて、入浴せさするを、例とせり。君平、その心づかひを、心苦しとて、辭みたれど、「これらの事は、ひたすらに、客を愛するのみならず。足下

歡（喜、悅）

の如き、國の爲に、力を盡す人の疲勞を、聊かなりともうち慰めんの心のみ。必ず辭み給ふな」とて、聞き入れず。かゝりし程に、君平は、ある夜、更闌けて、子二つの頃歸れるに、蘆庵は、いまだいねず。例の如く入浴させ、飯をすゝめ、さて、いふやう、「われ、足下を宿せる日より、蔬菜の外に、物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕を憩はせんとて、手づから、風呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を訪ねめぐればとて、今までは、用なからんに、道草食うてか。老人に、物を思はせ給ふこと、

更
午後八時より午前六時までを、二時宛に割りて、初更(戌)二更(亥)三更(子)四更(丑)五更(寅)の稱あり。

心得がたし」と呟く。君平聞きて、容を改め、「翁のうらみ理なり。わが非を飾るにあらねども、こよひ、かく更たけたるは、いささか、故あり。懺悔のため、笑に供へん。今日は、某の天皇の陵を訪ねたりしに、日暮るゝまで、たづねもあはで、思はずも、等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ、心頭に起りて、堪へられず。墓に向ひて、罵るやう、「梟臣尊氏、靈あらば、今いふことを、たしかに聞け。汝が、一旦治りたる建武重祚の世を亂して、逆に取り、逆に守り、毒を、後世に流ししより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典も、ために燒け失せ、王室も、これによりて衰へ、歷代帝王の山陵すらも、迹なくなりて、われらにさへ、飽くまで、物を思はするは、皆、これ、汝が罪なり。

等持院
山城國葛野郡衣笠山の麓にあり。

天罰思ひ知るべし』とて、杖をもて、石塔を、思ふがまゝにうち敲きぬ。かくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋にたちより、怒に任せて飲みし程に、六七合を罄したりき。さて、酒屋をば出でしかど、醉ひて、足も定らず。このまにて歸らば、必ず、翁に叱られん、半醒して行かんと、株に、尻をかけしより、うまいやしけん、驚き覺むれば、早、更闌けたり」と語るに、蘆庵は、呵々とうち笑ひ、「さても、世には、似たる馬鹿者もあるものかな。我も、去にし年、或日、靈山の邊に逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎし時、ゆきもえやらずにらまへて、「長嘯子、不滅の罪あり。わぬし、自ら、これを知るか。わぬしは、豐太閤の外族として、位高く、采地も廣かるに、心ざま、武士に似ず、伏見の籠城に、敵の旗色に、鬼胎を懷きて、鳥居元忠等を棄殺にし、かつ、事平ぎて後、罪を蒙り、纔に、命を助けられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌、多く詠じたる、一盲、衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬは、これ、不滅の罪にあらずや。冥罰、かくの如くならん」と罵りながら、杖を擧げて、墓を毆ちたることありけり。こは、よく似たるにあらずや」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく、腹を抱へきとぞ。（瀧澤解―兎園小說）

靈山　京都の東山にあり。

長嘯子　木下勝俊、秀吉の室北政所の兄の子。伏見の戰後、出家して、東山に蟄居し、長嘯子と號す。紀元二二三〇年―二三一〇年

鳥居元忠　德川氏の忠臣、紀元二二九九年―二二六〇年

一九、岡井某に與ふ

先夜は參上、御意を得、殊にかき餅の御饗應、忝く存じた

普天之下
無非王土

林大學頭
衡、述齋と號す。紀元二四二八年—二四九八年

てまつり候。その節は、折あしく、他人來合はせ候ひしかば、用事の談話申し悉さず候ひき。さて、拙者儀、かねがね申しし如く、歷代帝王の山陵、久しく荒廢して、御祀も廢れ、なかには、その所在すら、明に知れずなり候ひしものも、これあり候間、訪ね求め候へども、なほ遂げず候。この度、林大學頭殿へ申し入れ、その使として、來月五六日までに出府、それより、すぐに上京仕るべく候。これ、一天の君、世々に、御祀ありて、尊崇すべき第一義に候へども、亂世以來、法壞れ、今、治平二百年に及べども、上に、さまでの有識これなかりしまゝ、たゞたゞ、等閑にあひなり候ひしこと、まことになげかはしき次第に候。幸に、當今、御老

佐野
下野安蘇郡
鹿沼
同國上都賀郡

中伊豆殿をはじめ、大學頭殿、いづれも、皆、一代の賢才に御座なされて、御政敎を勤め給うて、延喜、天曆の昔にも劣るまじく候。この時にして、その一二の闕を補うて、忠功を達する事、拙者、多年の願に候。これに就き、江戸にて、親しき二三の旗本より、四五兩は得べく候。また佐野、鹿沼などの、師友の間にて、衣服、腰の物の支度を致させ、數年浪々の拙者、やうやう、眞の武士にまかりなるべく候。しかれども、關東より千里西遊、六七十日の物入に候間、金子十兩、拜借仕りたく候。この儀、先日申しいれの節、御承知なし下され候ひしが、なほ、金員數は、しかと申し上げず候ひしゆゑ、更に、かくの如く申し上げ候。昔、商人に

も、義を好みし者には、奥州の金賣吉次が、九郎義經における、天川屋儀兵衛が、大石内藏之助におけるこの外に、金を輕んじ、忠義の名を立てつる者、多く御座候。この度の儀、拙者も、霜雪の寒を冒し、旅行すること、貴公にも御推察の上、御貸し下されぬ候はば、これまた、天下第一の義舉にて、忠感、定めて、神明に達し候はん。かつ、貴公は、拙者における母方の姻親にて、千金を蓄へて、もとより、一鄕の良と聞きたれば、拙者、外に求めずして、直に、貴公に御賴み申すことに候。不備。（蒲生秀實）

二〇、御くるま

行幸拜觀　落合直文

わが袖に、かよふもかしこ、御くるまの、
すぎゆくあとの、はるのはつ風。

別　佐々木信綱

さらばとて、別るゝ駒の、たてがみに、
あさかぜさむし、あふさかの關。

玉　小出粲

あまりにも、瑕あらせじと、思ふより、
ちひさくなりぬ、あたら眞玉は。

雲　福羽美靜

さだめなき、ものと定めて、見渡せば、

雲もこゝろに、たがはざりけり。

井上通泰

水

杉垣の、したより出づるやり水の、
うき世にいづる、聲きこゆなり。

二一、祝文二篇

吾妻橋開通式祝辭

吾妻橋、架設、その工を竣へ、こゝに、落成の式を行ふ。鐵欄、高く、空際によこたはり、石柱、深く、河底に入る。結構の堅牢なる、觀望の壯麗なる、實に、府下第一とす。顧るに、明治十八年、洪水横流して、堤防を崩し、橋梁を破り、府下の數大橋、みな、害を被り、この橋も、亦支ふる能はざりき。乃ち、その年十一月、始めて、工を起し、こゝに至りて成る。月を閲すること二十四、金を費すこと十餘萬、一欄一柱、みな、府民が、辛勞の餘に出でざるはなし。蓋し、この橋や、從來、府下四大橋の一に居り、その路線の通塞の、大に、府民の利害に關する、固より、言を竣たず。卽ち、橋梁の堅脆、その禍福のかゝる所、亦僅少ならず。これ、工事の彌久を厭はず、費額の增大を吝まず、遂に、今日の盛擧を致せる所以なり。今や、この美觀に對し、曩日の災害を追想せずんばあらず。而して、府民の鋭意なる、あへて、苟且に安んぜざるもの、既に、かくの如し。今後、再び、崩壞の患なくして、府民の幸福を、永遠に保全する、鐵石も啻ならざらんこと、これ、有朋の、信

吾妻橋　東京市を流るる隅田川の五大橋の一。

じて疑はざる所なり。（内務大臣山縣有朋）

同　答辭

吾妻橋の架設竣るを告ぐ。すなはち、本日をトして、開橋の式を行ふ。内務大臣閣下、親しく臨場せられ、あつく、この擧を稱揚せらる。實に、これ、府民の光榮といふべし。希くは、閣下が盛意を、將來に紹述して、永久忘失することなく、漸次、この規模を擴め、土功の改良、その宜しきを得、また、かくの如き盛擧を、他日に見るあらんことを。謹んで、答辭を呈す。（東京府知事高崎五六）

厚（篤、敦）

二二、桃山時代の工業

八道　京畿、忠清、全羅、慶尙、咸鏡、平安、江原、黃海。

豐臣氏の起るや、難波石山の大阪城を初め、京師内野の聚樂第、伏見桃山の第など、續々、大土木を起したるがため、我が建築術の上に、一大進歩を來したり。殊に、桃山御殿の建設は、文祿の三年に當り、秀吉、十四萬の貔貅を叱咤して、韓の八道を蹂躪し、武威を、海外にかゞやかしし頃なりしかば、その建築、彫刻等の上にも、豪邁の氣象、おのづから顯る。

桃山の建築は、今、詳に考ふべからざれど、瓦の端を、黃金にて塗り、百間廊下に、黃金の燈籠を釣りしなど、その壯觀想ふべきなり。今も、世に、桃山の式を受けて、建築したるもの、山城、近江あたりの寺院にありて、その式、皆一定に出でたり。例へば、長押、鴨居を、黑漆にて塗り、その上に、蒔繪を施し、襖に、黃金

貼（張）

を貼りつけたるなどの類にて、皆、そのかみ、豐太閤の意匠に出でしものなりといふ。京都には、西本願寺の飛雲閣の建築、又、今の豐國神社の門扉の彫刻など、桃山の遺物の現存するものあれば、就いて、その一斑を窺ふべし。豐太閤は、獨、これ等、外部の建築、彫刻等に、意を用ゐしのみならず、茶器の類より、衣服、調度の類に至るまで、おのが意匠を、工人に授けて、作らしめしもの多かりき。筑紫の陣中にありて、征韓の軍を指揮せし時すら、佐志山に、窯を築きて、種々の茶器を作らしめ、又、おのが意匠を、日記に圖して、はるばる、京師に送りて、茶入を燒かしめ、蒔繪をまかしむるなど、常に、意を、工藝の上に注ぎて、奬勵せられしかば、京都、伏見の間に、名工輩出して、工藝の

佐志山　肥前國東松浦郡。

多（饒）

隆盛を極めたり。

元和以來、京都、伏見に住居せし、豐臣氏恩顧の工藝家は、散じて、二つとなり、一は、江戸に入り、一は、加賀に入れり。こゝにおいて、蒔繪、金屬彫刻等の美術、始めて、加賀に起りぬ。さて、江戸に入りしものは、社會の變遷と、時代の風尚とに連れて、後には、全く、桃山の遺風を失ひしかど、加賀に入りしものは、北陸の別天地にありて、その遺風を、子々、孫々に傳ふることを得たり。これ、加賀の美術、工藝の特色にて、世は、江戸將軍の時代となりぬれども、加賀蒔繪、象眼など稱して、賞翫するもの多かりし所以か。（横井時冬―日本工業史）

二三、植物の景觀と氣象との關係　その一

植物の景觀と、自然の氣象との間には、おのづからなる關係ありて、互に相依り、相助けて、以て、この宇宙の美を現出するなり。故に、晴、雨、曇、雲、風、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する、植物の景觀に注意すれば、まことにおもしろき趣あるものなり。

春の日は、霞たなびきて、曇勝なるものなるが、かゝる空合に、山櫻の亂れたるは、まことに、趣深きものにして、その調和の美いふべからず。今、假に、この櫻花をして、澄み渡れる秋の空に開かしめば、いかなるべきか、おそらくは、優美、艶麗なるその特性は、その十が一をも現ずること能はざるべし。又、春の野の、霞に籠められて、をち方の山々は、淡き紫色に包まれ、紫雲英、蒲公英などの、一面に咲き亂れたる中に、蝶、蜂などのおとづれ來て、心ちよげに飛び狂へる光景は、よく、この頃の日和の特徴をあらはせり。

萬緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は、水分を含みて、何となう、夕立の雲起り來べきかと思はるゝものなるが、その青き空に、緑滴らんばかりなる茂樹、叢竹の、枝さし交したるは、その配合、ことに妙にして、人をして、そゞろに、夏の面白きを感ぜしむ。

やがて、秋晴の節となれば、空氣、きよらかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、楓樹、公孫樹などの色づきたるが、そ

の快晴の氣に照し出されたるなど、また、いひ難き趣あり。冬の末より、春のはじめにかけては、日中にても、寒さ劇しきに、その、寒く、晴れたる朝に、梅、臘梅などの、いち早く咲き出てたるは、心ちよきものなり。

曇の空には、さまざまあれど、春の花曇は、最も、趣ありて、よく、その特徴をあらはせり。又、今にも降り出でんかと思はるるやうなる、雨を含める空には、柳、杉、樅などの林は、最もおもしろく見ゆ。

雨のおもしろきは、燕子花、花菖蒲、溪蓀などの咲き出づる五月雨の頃なるべし。降るかとすれば晴れ、晴るゝかと思へば、また降り出でて、その度毎に、花の艶麗を増すなど、人をし

見（看、視、觀、覽、瞻、瞰）

て、限なき一種の幽情を催さしむ。殊に、これらの植物の花瓣と葉とは、おのづから、雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は、その上に、小き玉水となりて、とゞまれるが、その美しさ、まことに、形容し得べくもあらず。

驟雨、雷雨などの、烈しき雨にも、また、おのづからなる植物の配合はあるなり。そは、多く、雨滋き地に生育せる植物、又は、さる地より移し植ゑられたる植物にして、彼の梧桐の如きは、その一例なり。その、直立して、膚青き幹、その、淺く切れ込みたる、廣き葉の、一は、新に洗はれて、一しほ、鮮綠の色を増し、一は、ばらばらと音立てて、その葉末より、餘滴をしたゝらする光景は、よく、この植物の、かゝる急雨に適せるを見るべし。

防（禦）

蓮の葉も、また、雨を受くるに適せるものなり。そは、葉の表に、一面に、天鵞絨のやうなる、こまかき突起ありて、その間に、空氣を含むをもて、雨に遭へども、少しも濡るゝことなければ、なり。かくて、又、その空氣は、よく、光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も、殆ど、これに等しき構造をなせり。

秋雨に就きて、聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ、人の心をひくは芭蕉なるべきか。秋も、末になりて、その葉の破れ、筋の現れて、見るからはかなげなるに、寂しき雨のうち灑ぎたる、人をして、殆ど、蕭條の氣に堪へざらしめんとす。

松は、特に、雨に適せる植物にはあらねど、その雨に沾ひて、細き葉の、束ねたるやうになりて、少しうつむきつゝ、雨滴を滴らするさまは、また、しめやかなる趣なきにあらず。

露（見、現、顯）

二四、植物の景觀と氣象との關係その二

雪は、寒國のものなれば、これに適するは、寒地の植物なれど、暖地の植物も、また、これに遭ひて、おもしろき景色を見するものあり。彼の常磐木の類、例へば、樅、杉、松などの類の、濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又、南天燭の、赤き實の、その間にほの見えたる、共に、色彩の配合上、見棄て難き美觀なり。又、松の、その、魁偉なる枝もて、竹の、その、しなやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は豪壯、一は清楚

の趣を表して、共に賞すべし。

風の趣も、また棄て難し。そよ吹く風の、草木をわたりて、優しき樂を奏する、木枯の、落葉を吹き捲きて、凄じき音をたつる、共に、興なからずやは。ことに、野邊の芒、水邊の蘆の、秋風に戰げる趣は、秋の風物の、最も、あはれ深きものなるべし。また、秋の夕、澄みわたれる空に、一點の雲もなく、さしたる風の渡るとも見えぬに、木々の梢の、そよそよとうち戰ぐは、いひ知らぬあはれの籠るものなり。

松風、松籟などいふも、これとおなじ趣にて、風もなき空に、松の梢の、ひとり、美妙なる樂を奏し出づるは、まことに、何の音ぞと怪まるゝものなるが、これも、眼に見えぬ風の見する

あはれにして、古來、幾度か、詩人の吟咏に上れり。

雲は、四時を分かずをかしきものなり。春霞のたなびきて、花かと見紛ふ空合、夏草の茂きが、上に崩れかゝれる雲の峯、秋野の空に飛ぶ白雲、いづれも、皆、とりどりのあはれ籠れり。又、彼の木曾、日光あたりの樅、栂、落葉松などの生ひ茂れる深林に、なかば、薄雲のかゝりたるは、まことに、よく、幽邃の趣をあらはすものなり。

霧は、高原に多きものなれど、平地、平原にも、また、全くなきにあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉、樅などの常磐木の見えかくれするさま、田沼、湖水などの、一面に罩められたるさま、亦、一種の風趣あり。

露は、夏、秋に下るものにて、朝、夙く起き出でて、草むらの間を行けば、その葉ごとに、美しくして、恰も、白玉の如くなるを見ん。ことに、稻、蘆などのやうなる、禾本科の植物、又、欵冬などの葉の、綠なる露は、規則正しく置けるを以て、その觀、頗る美なり。

月は、季節によりて、その觀一ならず。春の夜は、曇がちにて、朧月おほし、世には、この朧月に、夜櫻を配して、得がたき美景なりといふものもあれど、彼の、朝日に匂ふ山櫻の、優美にして、壯快なるには比すべくもあらず。夏の月は、これに反して、頗る快闊なるものなり。ことに、雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、いひがたき涼氣を催さしむ。中秋の滿月は、空に冴えて、その光、まことに、常と異れるは、よく、人の知れるところなり。

月夜に配合せる植物は、あまり多からず。彼の、暗香の浮動を賞すべしといひならはせる梅なども、その花の美觀は、なほ、晝間を以て勝れりとす。されど、一面よりいへば、とりいでて、これといふべき好配合のなきは、たまたま、以て、適くとしてよからざるなき、月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐の月、皆、とりどりのあはれを具へざるはなく、さては、秋野の滿月、夏山の曉月など、いづれも、他に求め難き景致を具ふるにあらずや。（三好學―植物生態美觀による）

暗香の浮動　宋の林逋の梅の詩に「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」。

長岡古志郡

怒(恚)

二一五、六太夫の晴雨計

吾が郷里越後の昔話にいはく。昔年、長岡在に、六太夫といふ農夫ありけり。晴雨をトすること、神の如く、一も違ふことなし。郷黨これを信じ、みづからも、亦信ずること篤し。この事、長岡の城主牧野侯の聞く所となり、徵されて、士班に列せられぬ。

その秋、侯の參覲に隨ひ、東上して、江戸に至る。主公、別邸に、客を招きて、鴨獵の企あり。その前日、晴雨を、六太夫にトせしめしに、報じていはく、「明日晴」と。何ぞ圖らん。當日、大雨、盆を傾くる如く、主客、皆濡れんとはこゝにおいて、主侯、大に怒り、六太夫を罰せしむ。六太夫、纔に、死を宥されて、郷に歸る。郷人、その、失策せし所以を問ふ。六太夫對へていはく、「郷國に在りて、晴雨をトするに、いつも、彌彦山に、雲の懸れる模樣によりて、トせしに、江戸に至りて後、屋に上りて、四方を望めども、彌彦山を見ず。因りて、止むを得ずして、富士山に、雲のかゝれる模樣を見て、トせしに、かくの如き大失策を來せり」と。

あゝ、世には、彌彦山の雲を以て、江戸の晴雨をトせんとする者、甚だ多きことなからんや。(石黑忠悳)

彌彦山 越後國西蒲原郡、高さ一九四〇尺、

二一六、運命 その一

世の中の出來事の、來りて、われらの運命を左右するもの、その數、日に百千なるのみならず。然れども、われらが、これを

認め得るは、たゞ、その表面に顯れ、實際に、結果を生ずる一半のみ。その、來らんとして來らず、殆ど、己の上に附著せんとして、遂に附著せず、そのまゝに消えゆく出來事は、また、實に夥しからん。もし、われらが、暗々裏なる「これらの出來事を認め得んには、われらの生涯の望と畏とは、まことに無限、無邊ならん。ダビッドのこと、以て見るべきなり。

われらは、ダビッドの既往を知らず、また、知るを要せず。われらは、今、たゞ、二十歳の少年、始めて、故郷の田舍を離れ、ボストン府にゆきて、商家の手代とならんとする途上にある彼を見るのみ。彼の履歴は、小學校、および、中學校にて、ひととほりの教育を受けたりといふのみにて、事足るべし。田舍少年の

重(累)

心安さは、車も借らず、馬も借らず、日出より歩き出して、既に、日中に至れり。時は、これ、夏のなかば、漸く覺ゆる疲勞と、ますます加る暑熱とは、彼をして、かたへなる樹蔭に休息し、乘合馬車の來るを待ちて、これに投ぜんと決意せしめたり。

鬱葱たる、幾株の喬木、丘の上に立ち竝び、ほとりには、また、きよらかなる泉の水の涌きいづるあり。たとひ、ダビッドならずとも、往來の人、誰か、この日中に、この樹蔭に遇ひて、ひとたび憩ふことを懷はざらん。ダビッドは、まづ、泉の水に、渴きたる喉を潤し、おもむろに、負ひたる包を解きおろして、その上に、つぎはぎせる、木綿の手拭を重ねかけ、これを枕として、仰臥せり。太陽の光は、うちかさなれる枝に遮られて、ダビッドの身

にいたらず。往來の路は、昨日の大雨に濕ひたれば、少しも、塵を飛さず。生ひ茂れる綠の草は、絕好なる蓐よりも快く、柔なり。泉の水は沸々として、常に、耳邊に鳴り、縱橫せる枝は、そよ吹く風の爲に、よりより微搖す。ダビッドは、忽ち、心陶然として、恍惚たるうちに、身は、いつか、うまいの裡に落ちぬ。

ダビッドは、樹蔭に眠り居たるが、途上には、或は、馬に跨り、或は、車に乘り、また、或は歩みて、ダビッドの前を來往するもの點點たり。或者は、わき目もふらず過ぎゆけば、彼の、こゝにあることを知らざるなり。或者は、たまたま、彼の、こゝに橫れるに寓目すれども、おのが心の、忙しき思念に蔽はれて、別に、心も留めず過ぎ行くなり。或者は、彼の、無邪氣に眠れるを見て、笑

卑（賤）

ひつゝ去るもあり。或者は、その、道傍に眠れるを卑みて、眉しかめつゝ往くもあり。非難、稱美、一讃、一譏すべて、ダビッドに輳れり。

やがて、一輛の、はでやかなる輕車ありて、毛色うるはしき、二頭の馬を縻ぎ、轔々として馳せ來れるが、この木立の前に至りて、突然とゞまりたり。そは、一本の轄ゆるみて、一箇の輪に、くるひを生じたればなり。車中にありつるは、商人夫妻にて、齡高く、品よき人なり。老夫妻は、從者が、輪を整ふる間、樹蔭に憩はんとて、立ち寄りたるが、その下に、ダビッドの橫れるを見るより、俄に驚きて、二三歩、後にさがりたり。ためつ、すがめつ、しばし凝視し居たりしが、やがて、心を安じたりけん、この

伸（延、展）

うまいせる少年を驚さざるやう、忍足して、再び、樹蔭にたち寄りつゝ、夫は、妻に低語せり、「あの、こゝろよげに眠れるさまを見よ、あの、呼吸する氣息の、極めて容與たるを見よ。これ、健康にして、心やすらかなるものにあらでは、あたはざるなり。もし、余をして、かゝるうまいを得しめば、余は、わが歳入の半を割くともをしからじ」と。妻は、今、風のために、一方の枝のおしやられ、一條の太陽の光、少年の面に漏れそゝぐを見て、みづから、手を伸べ、縺れたる枝を解き、これを蔽ひやりながら、また、夫に低語せり、「天は、この少年を、われらに與へ給ふと見ゆるなり。われらが、從弟の子の所行に失望せる後、偶然、この樹蔭にたち寄りて、この少年に邂逅するは、まことに不思議ならずや。かつ、熟視すれば、何となく、面ざし、逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に、彼を喚び醒さんか」と。夫はうち案じて、「そは、何の爲ぞ。われらは、まだ、少年の素性をも知らずして」といへば、妻も、やゝ惑ひながら、なほも思ひ入りて、「さりながら、かの、無邪氣なる容貌、かの、無心に眠れる姿よ」といひぬ。

今や、一箇の、莫大なる福は、ダビッドの上に臨めり。この老夫妻は、たゞ一人の子、ヘンリーを先立たせ、家に蓄へし、巨萬の富を相續せさすべき者もなく、せめては、遠き從弟の子にと日ざして、これを尋ねしに、その子は、所行不良にして、心に適はず、いま、失望して、ボストン府に歸るなりけり。人は、かゝる時に當りて、さまざまの想像をも畫くものなり。妻は、再び反

復せり「試に喚び醒さんか」と。同時に、背後に、從者の聲あり、「修繕整ひて候ふ」と。

老夫妻は、この聲に、忽焉として、われに復り、相攜へて、車上に、身を置けり。ダビッドは、なほ鄕々然たり。

二七、運命　その二

老夫妻を載せたる輕車は去りて、まだ、一里は行かざるべしと思ふ時、また、二人の人ありて、この樹蔭にたち寄りたり。木綿の頭巾を、目深に被りたれば、審に見るべからざれども、顏の色、いたく黑くして、衣服粗野に、且、こゝかしこに、幾多の汚點さへ印してあり。こはこれ、この邊に徘徊する山賊にして、今、その贓物を分たんとて、この樹蔭に來れるなり。かくて、ダビッドの横れるを見るより、一人は、早くも、他の一人に、「汝は、あの、枕にせる包を見ずや」と囁けば、「されど、もし、目を覺したらば」といふを、ひとりは、急に、懷中を探りて、匕首の柄を、少し露して、「これのみ」といふ。やがて、二人は、ダビッドのほとりに進み寄り、一人は、その匕首を拔きて、胸に擬し、一人は、頭の方にまはりて、その、枕とせる包を抽かんとす。この二人の顏、もし、ダビッドをして、目を開きて見しめば、直に、以て、惡魔とやなさん。この時、忽ち、一頭の黃犬あり、鼻をうごかして、頻に、地を嗅ぎつゝ、こゝに走せ來れり。ひとりの賊は、目ばやく、これを見つけていへり、「やめ、やめ、かの犬の主人、ついて、こゝに來るな

藏（納、收）

らん」と。

一人は、匕首を、懷中に藏めたり。一人は、ブランデー一壜を取り出せり。仕事の、將に成らんとして、敗れたるを笑ひのゝしり、互に、幾口かを飲むうちに、おのおの、黑き顏に、一種の紅を生じ來れり。後には、ダビッドのことをば忘れて、がやがやとうち興じつゝ、相攜へて、また出てゆけり。しかも、ダビッドは、なほ鼾々然たり。

一時の間は、ダビッドの疲勞を醫し盡せり。ダビッドは、すこし身動せり。徐に、その唇を搖せり。聲はなけれど、口の中に、ひとり、半殘の夢を語れり。をちかたに起る輪聲、既にして殷々、既にして轟々、益近くして、益高く、今や、轣轆として、尺寸の間に

來れり。これ、一輛の乘合馬車なり。ダビッドは、俄に躍り起てり。「こや、御者、こゝに、旅客あり」。「上層に、席あり」。ダビッドは、馬車の上層に登り坐せり。ダビッドは、前途幾多の望をかけたる、樂しきボストン府に馳せ往けり、かの清泉には、一顧眄の別をだになさずして。

一たびは、富の神の、こゝに來りて、黃金の光、その水面に照射せることもありしは、ダビッド知らざるなり。また、一たびは、死の神の、こゝに來りて、その水上に、血を染めんとせることもありしは、ダビッド知らざるなり。嗚呼、彼は、生涯、遂に、これを知らざるなり。（森田文藏）

二八、桃李不言

一　桃李言ハザレドモ、下自ラ、蹊ヲ成ス。（史記）

一　水、至ッテ清ケレバ、魚ナシ。人、至ッテ察ナレバ、徒ナシ。（漢書）

一　瓜田ニ、履ヲ納レズ、李下ニ、冠ヲ整サズ。（文選）

一　道邇シト雖モ、行カザレバ至ラズ、事小ナリト雖モ、爲サザレバ成ラズ。

一　恆産ナキ者ハ、恆心ナシ。（孟子）

一　心ハ小ナランヲ欲シ、志ハ大ナランヲ欲シ、智ハ圓ナランヲ欲シ、行ハ方ナランヲ欲ス。（文子）

一　普天ノ下、王土ニアラザルハナク、率土ノ濱、王臣ニアラザルハナシ。（詩經）

二九、セイロンの古都　その一

「カンヂーに往きしか」とは、コロンボ市民の、常に、旅客に對ひて、提起する質問なり。蓋し、カンヂーは、本嶋の古都にして、佛祖の遺蹟の存せるが故ならん。余は、かねてより、同地に遊ばんとの志ありしかど、途上の汽車、頗る不完全にして、ともすれば、中途にして、停止することありと聞き、いまだ決行せざりしに、同僚の中に、頻に、同行を勸むるものありければ、遂に、意を決し、一人の黒奴を傭ひ、まづ、電車に乘じて、マラター停車場に向へり。時に、五月一日午前七時なり。

佛祖　釋迦牟尼

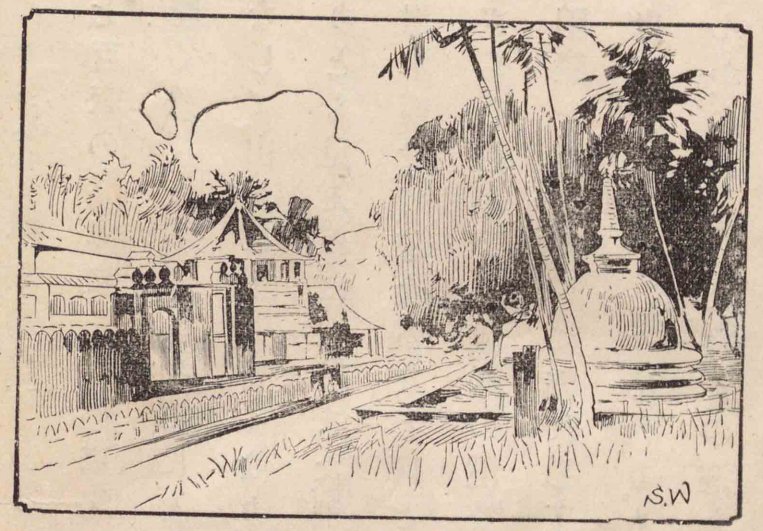
マラターマ　コロンボ市の郭外にあり。

停車場には、又、數名の同僚の先著せるあり。一行相合して十四名、汽車の一室を占領せり。やがて、汽車は、一聲の鐵笛と共に、徐々、進行を始む。車窓を開きて、眸を放てば、風景一として、奇ならざるはなく、沼池、遙に相連りて、紅白の蓮花の、點々、水を染めたるなど、美觀いふべからず。冷風、一たび動けば、清香脉々として、車窓を撲ち、心氣、頓に爽然たり。汽車は、帶の如き小逕を走り、一轉して、林中に入り、椰子、檳榔樹、麪包樹の參差として、枝さし交したる間を過ぎて、やがて、小丘の連りたるあたりに出づ。見わたすかぎり、蔦、葛生ひ茂りて、莽々たり。そこには、猛獸、毒蛇の潛めるものありて、時に、軌道の附近に出沒して、人を害することありといふ。

カンヂー停車場は、コロンボを距る七十四哩にして、一千七百呎の高處にあり。停車場に近づくに從ひて、軌道の勾配、漸く急になりゆき、次第に、その度を增して、遂に、螺旋の形をなして、山上に上り行くなり。右は斷崖千仞、谷深くして、底ありとも見えぬに、左は、また、削れるが如き巨巖、高く、空に聳え、樹木瘦せて、疎なるなど、何となく、人をして、悽愴の感に堪へざらしむ。かゝる險難の境なるを以て、鐵道敷設の工事、頗る困難を極め、過ちて斃れし工夫、その數を知らず。永く、こゝに、鬼哭峠の名をとゞめたり。もし、汽車にして、その一歩を過たんか、われらも、また、その迹を履まんのみ。しかも、機關師の不熟練なる、しばしば、汽車の進行を停止し、或は後退して、幾度

過（誤、謬）
永（長）

か、われらをして、慄然たらしめたりき。されど、幸にして、何の恙もなく、午前十一時半、カンヂーに到著せり。



カンヂーの一古寺

かくて、われらは、まづ、黒奴の人車を傭ひて、クインス、ホテルに向ふ。道路、砥の如く、鬱葱たる大樹、これを挾みて、涼意、まことに掬すべし。ホテルは、カンヂー湖畔にありて、太だ、風景に富めり。一行は、ホテルの馬車數臺に分乘して、そこを出でたり。對岸の丘をめぐりて、遙に瞰下すれば、峯巒、四方を圍みて、綠樹、市内に連り、その盡くるところ、湖水、鏡面よりも滑にして、岸には燃ゆるが如き草花、今をさかりと咲き亂れ、そのあたりなる、白堊の古刹と相映じて、色相の配合、美妙を極む。赤蛇の蜿々たるが如き、土人の市街、豆大の黒點の蠢動するに似たる象、水牛の群、一々指點すべし。更に、身邊を顧みれば、バナヽ、椰子の實などの黄熟して、果汁滴るが如くなる、人をして、坐に、食指の動くを禁ずる能はざらしむ。

三〇、セイロンの古都 その二

それより進むこと數町、黒奴、卒然、われを顧みて曰く、「紳士、

留（止、停）

かしこの小嶼を見よ。最後のカンヂー王が墳墓のある處にして、今も、古蹟の一に數へらるゝ。さては、セイロン滅亡の悲劇を留め、後人をして、盛衰、興亡の、常なきを歎ぜしむるは、かしこの墳墓の主なりしよ。歴史を考ふれば、二千四百四十餘年の昔、シンヘル王、はじめて、このセイロン嶋に君臨してより、系統連綿として、國富み、民榮え、佛法、王法二つながら行は、れて、花咲き、鳥歌ひ、極樂淨土を、まのあたり現出せる如き觀ありしに、西暦一千五百五年、葡人の、海の一方より現れきて一たび、足を、この地に入れしより、國内の平和は、漸く亂れ、次いで、蘭人の侵入となり、はては、英人の亂入となりて、國内、遂に、廐の如くに亂れぬ。かくて、一千八百十五年、國王と英國總督との間に、大衝突を惹き起し、劇烈なる戰爭となりぬ。義を重んじ、恥を知れる黑人は、憤然起ちて、王軍に投じ、干戈を執りて、英兵に當りしかど、大勢の趨くところ、いかにともする能はず、連戰連敗、勇士、多くは、戰場の露と消え失せぬ。こゝにおいて、勢に乘ぜる英兵は、進軍の喇叭につれて、カンヂーに進入し、王宮を圍み、直に、王を擒にし、凱歌を揚げて、引きあげたり。その後、王は、獄中に、憤死を遂げ、數千年來の社稷は、こゝに、全く亡びて、全嶋、悉く、英國の所領となり畢りぬ。嗚呼、忠臣、悉く戰死し、妻子殺戮せられて、身は、外人の囚虜となる。盛者必衰の習とはいひながら、懷うて、こゝに至れば、誰か、よく、この、可憐なる王の末路に、一掬の涙を濺がざるものあらん。憐

むべし、數千年來、その恩に浴し、その粟を食みたる黑人は、既に、氣慨を失うて、今や、王を憶ふことの冷なる、なほ、路傍の人に對するが如く、墓前の香華、久しく絕えて、あと弔ふものなし。水、とこしなへに、恨を浮べて、旅客の腸を斷ち、鳥、空しく、悲を訴へて、多感なる遊子を泣かしむ。われは、今昔の感に堪へず、首を垂れて、瞑目すること多時。

それより進みて、一古刹を訪ひ、更に、寺門をいでて、右折して進むこと、百步ばかりにして、左方に、一大菩提樹の立てるを見る。枝葉蓁々として、天を蓋ひ、人をして、靈あるかを疑はしむ。こゝは、嘗て、佛祖の、衆生をあつめて、說敎せし地なりといふを聞きて、遙に、二千餘年の昔、かの聖が、衆生のために、あまねく、國內を歷遊して、その、諄々たる說法をなしし當時を想ひ、顧みて、この木石の、親しく、佛體に觸れたるを考ふれば、おのづから、尊崇の念の、油然として生じ來るを覺ゆ。乃ち、記念のために、菩提樹の數葉を採り、それより、馬車を反して、停車場に赴き、歸途につけり。日、既に落ちて、微雨蕭々、たゞ螢火の、闇を照して、飛び交ふを見るのみ。（小笠原長生―渡英日錄）

三一、　忠君愛國

余が獨逸留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を帶びて居る男爵シーボルト氏の演說を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は、「西

洋各國の革命は、國王に對する不滿から起って、その結果は、いつも、王室の權威を縮少し、或は、全く顚覆するものであるが、日本のは、これに反して、革命毎に、皇室の稜威を益し、繁榮を增進する」といふ意味であった。これは、如何にも、よく、我が國體の、萬國にことなったことを言明したものといはねばならぬ。

かの大化改新といひ、明治維新といふ、政治上の二大變動は、我が國なればこそ、極めて容易に成就して、「雨降って、地かたまる」といふ結果が得られたのである。新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた時、制度改正の詔敕が、一度煥發すれば、祖先以來の領土、領民もさし出し、既得、將來の權も、悉く打ち棄てて、唯々、諾々として、大命を承るといふことは、決して、外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ、我が國民は、萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴って、進歩したのである。かういふ場合には、外國では、必ず、國王と人民との衝突を免れぬ。一旦、人民と衝突すれば、國王が、散々な目に逢はされた例は、枚擧に、暇が無い。國外へ出奔する位は愚なこと、遂には、刑場に引き出され、斷頭臺上の露と消えるといふ、英國、佛國の歴史などは、日本人の目からは、殆ど信ぜられぬ沙汰であって、小學から、中學にはいって、始めて、外國の歴史を學ぶものは、何人も、必ず、外國史に、慘酷、無道の事が多いのに、驚くに相違ない。元來、革命とい

天之命云々
易の革の卦辭

二十五朝
夏、殷、周、東周、秦、漢、後漢、蜀漢、晉、東晉、宋、齊、梁、陳、隋、唐、後梁、後唐、後晉、後漢、後周、宋、南宋、元、明、

ふ語は、「天之命革而四時成」といふ語から出たので、支那人は、昔から、天子は、天の命を受けて、百姓を治めるものだといふ思想を、根本として居る。それ故、聖人、賢者たる以上は、誰が代って、天子になっても構はぬのである。これが爲に、歷代二十五朝、長い朝廷でも、三百年とは續かぬ。その時には、天の命が革ったものと覺悟して、平氣で、新しい天子を戴いて居る。かういふ國々には、決して、大化の改新や、明治の維新の樣な改革が行はれる筈はない。英吉利の貴族は、今でも、大きな領地をもって居る。獨逸の國も、さうである。日本國民の、皇室に對する考は、古今、東西、全く、類例が無いのである。

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起って、若しくは、權力を以て、若しくは、輿望により、遂に、帝王の位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民である。これが、諸外國民の、王室に對する考であらう、日本人は、皇室をば、我々國民とは、一種別なものと見て居る。支那には、「王侯將相、何有種」といふ語があるが、日本人は、帝王といふ位は、國民の、決して、覬覦すべきものでないと、誰も教へはしないが、祖先以來、さう考へて居る。長い歷史の中には、皇家に、弓を挽いた者も無いことは無いが、天子の位をねらふ樣な考は、決して無い。大日本史には、源義朝や、源義仲が、叛臣傳に入れてある。これは、天子に向って敵對した事の大義、名分を正したので、本より、皇室を陷れようとした謀反人では無い。いづ

王侯將相云云
秦の陳涉の語。

れも、皇室の寵を失った悔しまぎれに、手向した亂暴人に過ぎぬ。多くは、朝廷の或官位を得たいと思ひながら、それが得られぬ爲に、騷動を起して、我儘を通さうといふ輩で、叛臣と雖も、朝廷の尊さを忘れぬものである。平將門も、檢非違使になれなかった爲に謀叛したのである。唯一人、弓削道鏡といふ坊主が、佛法、王法を一つにして、自分が、その位に坐らうといふ、不屈な了簡を起したが、忠誠な臣民の聲は、八幡の神託となって、忽ち、これを排斥した。その外には、一人も無い。藤原氏が、廢立を行ったといっても、自分の女の生んだ皇子を、皇位に卽かせたいといふ慾望で、これが、卽ち、人間としての最大慾望であった。その慾望さへ達すれば、

この世をば
の歌
藤原道長の作。

この世をば、我が世とぞおもふ。望月の、かけたることも、なしとおもへば、

と云って、大滿足したのである。（芳賀矢一―國民性十論）

桶峽
尾張國知多郡

三二、桶峽（中村秋香）

轟くいかづち篠つく雨、
あやめもわかぬ闇の夜を、
神のたすけと岨づたひ、
轡をつゝみ草摺卷きて、
攻め入る必死の三千騎。

沓懸、笠寺
尾張國愛知郡
大高
同國知多郡

沓懸、大高、笠寺の、

清洲
同國西春日郡、織田信長の本城。

野にも山にも充ち滿ちたる、
四萬五千の駿河の軍勢、
明日は清洲を攻めおとし、
決河破竹のいきほひにて、
尾張の國をさだめむと、
心おごりの酒うたげ。」
松の嵐は琴のしらべ、
鳴神のおとは鼓のひゞき、
よに心地よきゆふべやと、
佩きつる太刀の緒うちとけて、
歌ひつ舞ひつ興も夜も、

いと闌なるをりしもあれ、」
四面におこる鬨のこゑ、
すは夜討ぞといはせもあへず、
雨よりしげき寄手の槍先、
嵐はげしきかたきの太刀風。」
天たちまちくつがへり、
地見る見る裂け、
きらめく稲妻光のひまに、
二千餘人の玉の緒は、
草葉のつゆと消えにけり。」
あゝさだめなき人の世や、

たのまれぬ人の身や。
さもいかめしく轟きし、
名はたゞ夜半のはたゝ神、
夢の名殘の松風も、
昔のあとや尋ぬらむ、
さみだれさむき桶峽。」

三三、戰後の實業その一

ナポレオンとの大戰　西紀一八一五年ワーテロー

おゝよそ、大戰勝の後には、その經營さへ誤らなければ、必ず、國運が勃興するものである。英國は、ナポレオンとの大戰後、二十餘年間に、世界をおどろかす大發展を爲し、世界に冠たる富を積んだ。獨逸は、普佛戰爭後の三十年間に、更に、英國を凌駕する勢を以て、勃興して來た。米國は、南北戰爭の後、非常の發展をして、遂に、今日あるに至った。して見れば、明治三十七八年の役後における我が國運も、この例に洩れないと謂ってよからう。

わが國の實業の現狀は、戰場の收獲に比して、まことに憐な有樣である。しかし、それが、まだ幼稚なのであるから、却って、大に有望である。

わが國は、土地の狹い割合に、住民が多く、二千五百年來、相當に、地の富を用ゐ來ったが、しかし、その耕地と、全國の面積と比較して見ると、一と七との割合に過ぎぬ。卽ち、わが國の

に戰ふ。
普佛戰爭　西紀一八七〇年―一八七一年
南北戰爭　西紀一八六〇年―一八六五年

卽(乃)

土地は、まだ、全面積の七分の一しか耕されて居ない。世には、わが國は山國だから、この上、耕地は得られなからうといふ人もある。しかし、世界の山國と呼ばれる瑞西は、その大部分、高山、若しくは、湖水であるに拘らず、その耕地が、全面積の半を占めて居る。これを以て見ると、わが國も、交通が開け、排水が行き屆き、製造業が勃興してくれば、これまで、耕作しても、利益のなかった所が、段々、利益を生ずるやうになって、今日の耕地の倍以上耕すことが出來ようと思ふ。加ふるに、わが國には、傾斜の地が多いから、これらの地を、牧畜の用に供したならば、少くとも、全面積の半は、農業に利用せられるに相違ない。

隨（從、順）

それから、わが國の森林業なども、交通の便利な地だけは、手が屆いて居るが、その他は、悉く、天然のまゝに放棄してある。又、濫伐や、山火事の爲に、少しも、草木のはえぬ禿山が、到る處に見える。木が無くて、草を刈るばかりの山も、夥しいことである。かくの如き土地が、今後、交通の開けるに隨ひ、森林に仕立てられたならば、森林の富も、餘程有望になるであらう。その他、地中に含蓄して居る、鑛物といふ無限の寶も、物質的文明の進歩に伴ひ、將來、わが國の富を增すうへに、大なる助を爲すものである。

いふまでもなく、わが國は、四面環海の嶋國で、非常に長い海岸線を有し、無數の嶋嶼さへもって居る。さうして、この長

い海岸線の沿岸には、いたる處に、勇敢な漁民が住んで居て、水産の利益は、實に夥しいものである。この漁民が、文明の進歩、發達につれて、船の構造を改良し、網の製法を改良し、終に、漁法を一變したならば、ベーリング海峽なり、閒宮海峽なり、世界中の、最も有利の大漁場が、漸次、日本漁民の手に歸するやうになるであらう。

三四、戰後の實業　その二

以上に述べた農業、森林業、鑛業などの、無限の利益は、人力を用ゐて、天然から得るものであるが、この外に、まだ、製造といふ大事業がある。この製造は、原料の外は、全く人力である。

起（發、興）

わが國には、段々、原料も出來るが、その大部分は、外國から輸入せられて居る。さうして、地理の關係からいへば、滿洲、蒙古、西比利亞、濠洲、太平洋沿岸の南北亞米利加等は、皆、わが國に、原料を輸入するに、最も有力な國々である。さうして、これらの内で、北米合衆國沿岸を除く外は、皆、天産物を輸入するに適當の地ばかりであるから、わが國は、製造の原料たる天産物を、これらの國々から得るに、非常な便利をもつて居る。

又、わが國は、西南部、東北部共に、到る處の山脈から、川が流れて居る。さうして、これらの河水が、皆急勾配で、海に注いで居るから、その川の水を利用すれば、幾百萬馬力の電力でも、容易に起すことが出來る。かくの如く、到る處に、石炭を費さ

易(安)

ないて、動力が得られ、また、この動力を利用して勞動すべき善良な數百萬の勞動者が得られるうへに、製造の原料を得易い好位置に居るのだから、日本の工業は、これから、大に勃興すべき、自然の運命をもって居るのである。又、わが國には、化學的工業の原料品たる硫黄を、夥しく產出するから、硫酸はいふに及ばず、あらゆる酸類を作ることが出來る。それゆゑ、わが國は、あらゆる化學應用の工業を勃興させる上に、特に、便宜をもって居るのである。

勿論工業が勃興すれば、その製造品の大部分は、輸出しなければならぬが、これには、鄰に、世界三分の一の人口を有して居る國があって、幸にも、供給の過剩を釀すやうなことは無い。要するに、支那といひ、朝鮮といひ、蒙古といひ、南洋諸嶋といひ、皆、わが國から、その製造品を供給すべき好市場である。即ち、第一、わが國は、距離が近くて、便利である。第二、運賃が低廉である。第三、わが國では、善良で、しかも安い勞動者を使ひ、安い原料を使ひ得る。これらの點において、歐米各國は、到底、わが國に對し、この市場を爭ふことが出來ないのである。それ故、支那、その他に對する、日本と歐米との製造品の競爭においては、わが國に勝つ國は、斷じて無いのである。

これらの理由によって、余は、わが國將來の工業が、國力の勃興と、國富の增進とに與って、大きな力のあることを確信するのである。今日、二十億の外債の元利も、わが農林鑛漁の

生産や、將來勃興すべき工業品に依って支拂ふことは、決して、困難なことではない。要は、これらに對する、戰後の經營、その宜しきを得るにあるのである。

その他、造船業、航海業等にも、われは、歐米を凌駕することが出來るのである。既に、三菱、川崎、大阪鐵工所、その他において、盛に、造船業に從事して居る。なほ、將來、この業の、盛大になり行くは、爭ふべからざる事實である。さうして、わが國は、到る處の沿岸に、漁民を有して居るから、歐米で、最も困難と認められて居る水夫は、わが國では、最も容易に得られるのである。かの對馬海峽に、露國の大艦隊を擊ち破った、勇敢なわが水兵の同胞は、幾百萬噸の船に乘り組ませても、決して、不足を訴へる、やうな事はない。かやうな國は、決して、他には見られない。すでに、航海業が盛になれば、同時に、輸出入が盛になり、貿易も、亦、從って、隆盛の域に進むのである。

要するに、戰場において、强敵を擊ち破った、決心と覺悟とを以て、各種實業の戰場に向へば、わが大和民族の必勝は、疑なしと謂ってよい。戰後のわが國民たるものは、この覺悟と決心とを以て、實業界に奮鬪して、大に、國力を發展させなければならぬ。（伯爵大隈重信演說による）

三五、職業の選擇

肅啓。令弟、實業に志され候由承り、一喜一憂致し候。一

喜と申すは、虚譽心の強き時代なるに拘らず、白馬金鞍連の群議を郤けて、斷じて、實業界に入らんとする決心の立派なるを稱してに候。一憂と申すは、令弟が、果して、實業に適せりや否やを憂ふるものに候。令弟、直截にして敢爲、些の屈折なく、心事高尚にして、求むる所あるなし。これ、貴族としては、立派なる貴族に候へども、屈折、變化多き實業社會に處する所以の才にあらざるべきかとも存じ候。植木屋は、如何にしても、大工には爲れず候。爲りたる所が、才能の誤用にして、損失に候。小生、嘗て、一少年を、商業學校に入らしめんとし、その父兄も諾し、本人も、承知致し候處、何時の間にやら、その志望を變じて、

送（贈）

軍人ずきとなり、到頭、今は、さる聯隊の中尉と相成り候。年齢より申せば、大尉となるべき筈なれども、商業學校の準備にて、空しく、歳月を送りし爲、この損失を招き候。一時の發憤は、永續する者にこれなく候。小生は、令弟の實業云々は、周圍の、何等の事情にか促されて、發憤せられたる結果にあらざるなきかと疑ひ申し候。もし、果して然らば、永續すべきものにあらず、斷じて放擲の方、然るべく候はん。つらつら、人生を觀察するに、人の運命は、略、その性質によりて、先天に決し居るが如く候。性質以外の事を爲さんとすとも、水を、高きに上らしめんと欲するにひとしく、その功勞に酬いざるべし。これ、老兄の、

冷靜なる判斷を要する所ならんと存ぜられ候。事、令弟の禍福に關す。直言不諱の段、偏に御許し下されたく候。

頓首。（竹越與三郎―三叉書翰）

新訂中等國語讀本卷五終

新訂中等國語讀本

全十冊定價 各金貳拾五錢

明治三十九年二月十六日再訂第二版印刷
明治四十年二月二十日再訂第二版發行
明治四十一年十一月一日新訂改版印刷
明治四十一年十一月四日新訂改版發行
明治四十二年一月二十五日新訂再版印刷
明治四十二年一月二十八日新訂再版發行

著者　故落合直文
相續者　落合直幸
補修者　文學博士　萩野由之
補修者　醫學博士　森林太郎
發行兼印刷者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平

發行所　東京市神田區錦町一丁目　明治書院
【長電話本局二四三八番】【振替貯金口座東京四九九一番】

販賣所　東京市神田區南乘物町　明治圖書株式會社
【長電話本局八九二番】【電話本局一六四番】【振替貯金口座東京四九一五番】

不許複製